

むさし ぶ し かがみ はたけやましげただ
武蔵武士の鑑 畠山重忠公について学ぶ

畠山重忠 辞典



深谷市教育委員会 編

ごあいさつ

武蔵武士の鑑と称された「畠山重忠」が1205年に横浜市二俣川で非業の死をとげてから800年を超える時が経ちます。

重忠生誕の地である深谷市では、時の流れの中で失われかねない全国に分布する畠山重忠ゆかりの地や事物、記録についての調査をしてまいりました。

調査の対象は、墓碑の残るところから伝説や言い伝えに類するものまで様々あり、今回掲載を見送ったものもあります。

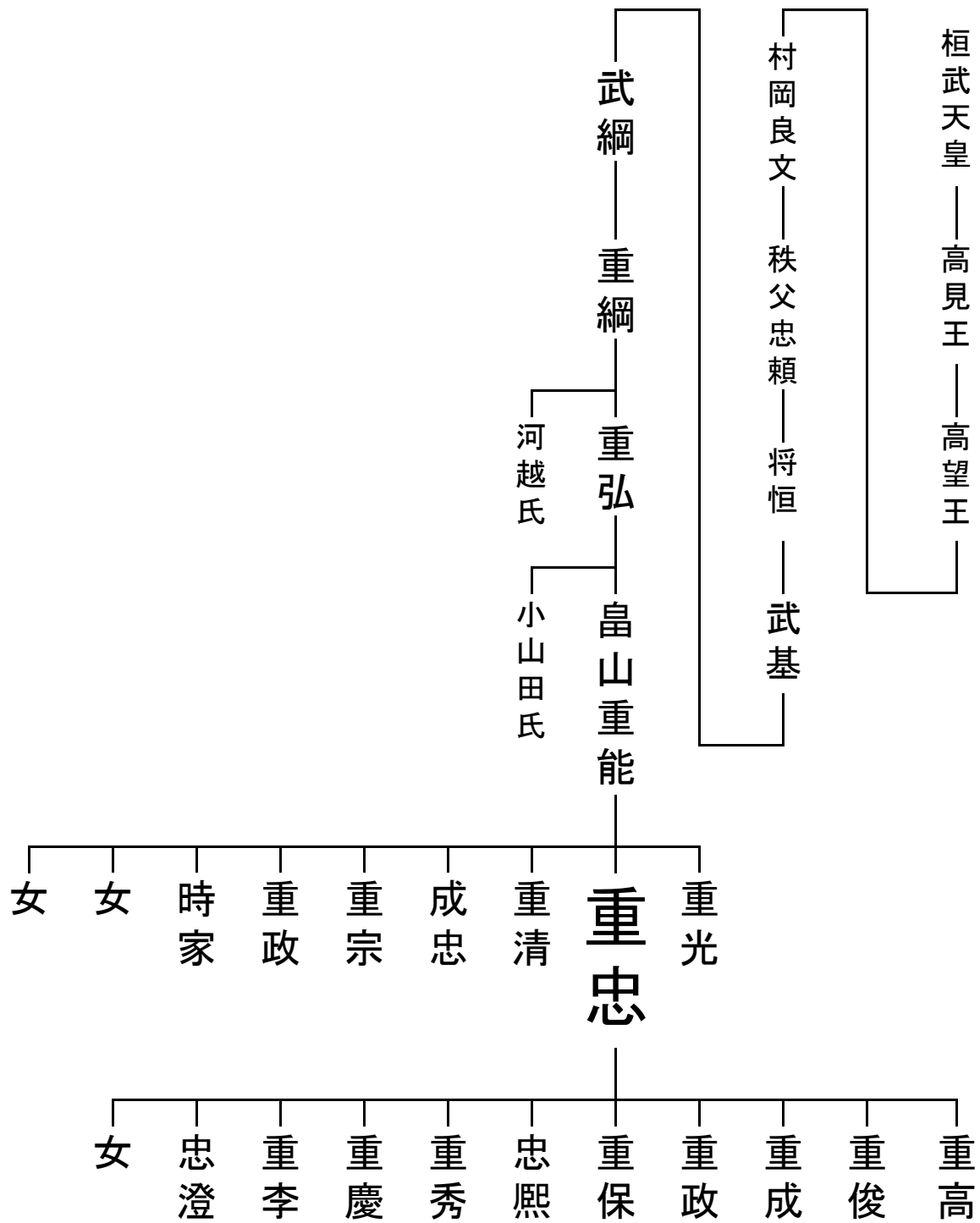
また、ほかにも多くのゆかりの事物が各地に伝わり、残っているものと想像されます。

これらを完全に網羅することは容易ではありませんが、まずは一旦これまでの成果を整理するため、本辞典をまとめさせていただきました。

今後も追加調査を行い、さらに充実した記録としていきたいと考えております。

重忠を中心に見た系図・	5
畠山重忠 関係年表・	6
畠山重忠にまつわるエピソード・	9
重忠ゆかりの地・	22
重忠ゆかりの品・	33
重忠に関係する人物・	35
関係用語集・	38
その後の重忠・	39
畠山重忠関連文献・	40
謝辞、おくづけ・	41

重忠を中心に見た系図



畠山重忠 関係年表

西暦	元号	月日	重忠関係の出来事
1087	寛治元年		秩父武綱、後三年の役で源義家に従い清原武衡を討つ。先陣をつとめ白旗を与えられる
1148	久安四年		秩父重綱が平沢寺長者塚に経筒を埋納する
1160	永暦元年	2月	頼朝捕えられて翌月11日伊豆に流される
1164	長寛二年		重忠、武蔵国男衾郡畠山館で生まれる。母は三浦義明の娘。幼名を氏王丸という
1167	仁安二年	2月	平清盛が太政大臣となる このころから重忠、畠山館で文武両道に励む
1180	治承四年	4月9日	源頼政、以仁王より平氏討伐の令旨を受ける
		6月24日	頼朝使者を武蔵に派遣し、累代の御家人を召集する
		7月	重能、小山田有重兄弟、大番役のため京へ上る(平家物語)
		8月23日	頼朝、石橋山で大庭景親らと戦い敗れる
		8月24日	重忠、鎌倉油井ヶ浜で三浦義澄と合戦、郎党五十余人死す。(小平の戦い)
			頼朝、箱根山に逃れる
		8月26日	重忠、河越重頼、江戸重長らと衣笠城に三浦氏を攻める
		8月29日	頼朝、箱根山より土肥(25日)、真鶴(28日)、安房(29日)に渡る
		10月2日	頼朝、武蔵に向かう
		10月4日	重忠、長井の渡りで河越重頼、江戸重長らと頼朝と参会。頼朝に従う
		10月6日	頼朝、鎌倉に向かい発つ。重忠先陣をつとめる
		10月16日	平氏討伐のため駿河に向かい館を発つ
		10月21日	奥州より義経馳せ参じ頼朝に謁す
		12月12日	頼朝、鎌倉の大倉館に入る。重忠最末に候す
1181	養和元年	1月1日	重忠ら、頼朝の鶴岡八幡宮若宮参詣に際し辻々を警固する
		3月24日	重能、春除目に兵衛尉の申文を提出する。(吉記)
		7月20日	重忠ら、鶴岡八幡宮若宮の宝殿上棟に際し、大工に与える馬を引く
1182	寿永元年	1月3日	重忠ら、頼朝の御行始に供奉して安達盛長邸に赴く
		4月5日	重忠ら、頼朝の江ノ島参向に供奉する
		8月13日	重忠ら、頼家の誕生に際し護刀を献上する
		この年	重忠、三峰神社に加護を祈願する(三峰神社文書)
1183	寿永二年	5月21日	畠山重能、小山田有重ら篠原の戦いで奮戦す(平家物語)
		6月	平家、都落ち
		7月	重能、小山田有重ら平宗盛より暇をうける(平家物語)
		この年	畠山小次郎重秀生まれる、母は足立遠元の娘
1184	元暦元年	1月	重忠、佐々木高綱の愛馬生唆(いけずき)のいななきを聞き、その名を言い当てたという(源平盛衰記)
		1月20日	宇治川の戦。重忠、丹党以下500騎で川を渡る。(平家物語)
			重忠、長瀬重綱を討ち取る(平家物語)
			木曾義仲戦死
			義経、宇治より京都六条院殿の御所に参上、重忠参列(源平盛衰記)
		2月5日	一の谷の戦。重忠、大手の大將源範頼に従い後、搦手の大將義経に従う
		2月7日	鴨越の逆落としをする。本田近常、平師盛を討ちとる(源平盛衰記)
		6月1日	重忠、平頼盛(池禅尼の子)の餞別の宴に列座する
1185	文治元年	11月6日	鶴岡八幡宮別当坊において音曲あり、重忠、今様を歌う
		2月15日	大物の浦で逆鱗の論議あり、重忠、梶原景時を抱いて争いを止める(源平盛衰記)
		2月20日	屋島の戦。重忠、扇の的を射よと命ぜられるも固辞し、那須与一を推す(源平盛衰記)
		3月24日	壇ノ浦にて平家滅亡する
		10月24日	重忠ら、頼朝の勝長寿院落慶供養参向に随兵として供奉する
1186	文治二年	11月3日	義経、京都を追われる。
1186	文治二年	4月8日	静御前、鶴岡八幡宮で舞を舞う。重忠、銅拍子を打つ
1187	文治三年	6月29日	伊勢國、沼田御厨の代官乱妨のため地頭職の重忠訴えられる
		8月9日	重忠ら、鶴岡八幡宮の馬場造成に群参する
		9月27日	重忠、沼田御厨のことで囚人として千葉胤正に預けられる。所領四ヶ所没収される
		10月4日	千葉胤正の仲介により許され武蔵国へ帰る
		10月13日	重忠から没収した所領、吉見頼綱にあてがわれる
		11月15日	梶原景時より、重忠に謀反の意ありと頼朝に讒言あり。下河辺行平を重忠の元へ遣わす。
		11月16日	下河辺行平、武蔵国へ出立
		11月17日	下河辺行平、畠山館にて重忠を説得
		11月21日	下河辺行平、重忠を伴い鎌倉に帰る。重忠、起請文を書くように言われるも、これを拒否する
1188	文治四年	3月15日	重忠ら、頼朝の鶴岡八幡宮大般若経供養参向に随兵として供奉する
		4月	高千穂神社文書に「天下より御名代ちちふ様(重忠公)十社大明神(高千穂神社)に参詣」と書かれる
		4月9日	重忠ら、奥州に下向する官使らの宿次雑事等の沙汰を命じられる
		7月10日	重忠ら、源頼家の着甲始の儀に列座する
		9月14日	頼朝、熊野から参向した尊南坊僧都定任と対面する。重忠ら、その場に列座する

西暦	元号	月日	重忠関係の出来事
1189	文治五年	1月9日	重忠ら、頼家の弓始めの儀に列席する（御的日記）
		4月18日	重忠ら、北条時房の元服の儀に列席する
		4月30日	源義経、衣川館で妻子とともに自害
		6月9日	重忠ら、頼朝の鶴岡八幡宮御塔供養参向に供奉する
		7月10日	頼朝、重忠の旧領伊勢国沼田御厨の住人らの訴えを受け、吉見頼綱の押妨停止を命じる
		7月17日	頼朝、奥州討伐軍を三手に分け、それぞれの部署を定める。重忠、大手軍の先陣を命じられる
		7月19日	奥州討伐軍発進、重忠先陣
		8月7日	重忠、阿津志賀山の城郭の堀を埋める
		8月8日	重忠ら、阿津志賀山の前で箭合わせを行い、金剛別当秀綱の軍勢を撃ち破る
		8月9日	三浦義村ら、先陣を争い、重忠の陣をひそかに馳せ越す
		8月10日	阿津賀志山の合戦。重忠、城将西木戸國衡を討つ
		8月11日	船迫宿にて、重忠が國衡の首を献ずる、和田義盛と前日の合戦の戦功をめぐり論争をする
		8月15日	頼朝が軍勢の狼藉を停止するよう重忠に命じる（島津家文書）
		8月20日	頼朝、先陣の重忠らに合戦の指示を与える
		9月6日	重忠ら、陣岡にて藤原泰衡の頭を実験する
		9月7日	重忠、梶原景時に代り由利維平の尋問を行い、その身を預かる
		9月20日	重忠、陸奥の葛岡郡を与えられる
1190	建久元年	4月11日	重忠ら、頼家がはじめて小笠懸を射る場に参候する
		9月16日	重忠ら、頼朝の上洛に供奉するために武蔵国から参上する
		10月2日	重忠、上洛の先陣を命じられる
		10月3日	頼朝、上洛のため鎌倉を出発する。重忠、先陣を務める
		11月7日	頼朝、重忠を先陣として入洛する
		11月9日	重忠ら、頼朝の参内に供奉する
		11月11日	重忠ら、頼朝の六条若宮・石清水八幡宮参詣に随兵として供奉する
		12月1日	重忠ら、頼朝の右大将拝賀の参院に随兵として供奉する
		12月14日	京都を進発
1191	建久二年	12月29日	鎌倉に帰着
		2月4日	重忠ら、頼朝の二所参詣（伊豆山神社、箱根神社）に供奉する
		3月3日	重忠ら、頼朝の鶴岡八幡宮法会および臨時祭参向に供奉する
		7月28日	幕府新造亭に移る。重忠、遷亭の儀列に参列
		8月1日	重忠ら、新造御所で行われた酒宴に列席する
		8月18日	重忠ら、新造の厩に馬を進上する
		11月19日	重忠ら、頼朝の命で多好方に神楽を習う
1192	建久三年	6月13日	永福寺建立のための木材を運び怪力をあらわす
		7月12日	頼朝、征夷大將軍に補せられる
		7月28日	重忠ら、征夷大將軍の除書を持参した勅使への贈物を調進する
		9月11日	永福寺工事進む。重忠、永福寺庭池の大石を一人で運び据える
		11月13日	重忠ら、永福寺の池石を置き直す
		11月25日	重忠ら、頼朝の永福寺供養参向に供奉する
			熊谷直実出家す
1193	建久四年	11月29日	重忠ら、源実朝の誕生五十日・百日の儀に十字餅（蒸し餅）を贈る
		2月	頼朝の命により佐助稻荷を再建す
		2月9日	頼朝に重忠、丹・児玉両党の仲裁を命じられる
		2月18日	重忠、丹・児玉両党の和平報告する
		5月8日	重忠ら、頼朝に従って富士野の巻狩りに赴く
		5月28日	曾我祐成・時致兄弟、父の仇、工藤祐経を討つ
		5月29日	曾我兄弟尋問、重忠尋問の座に列す
		11月15日	重忠、頼朝と真円の対面の座で陪膳（給仕役）をつとめる
1194	建久五年	11月27日	重忠ら、頼朝の永福寺薬師堂供養参向に先陣随兵として供奉する
		2月2日	重忠ら、北条泰時（頼時）の元服の儀に列席する
		6月28日	頼朝、重忠らに宛て課した東大寺造像を催促する
		8月8日	重忠ら、頼朝の日向山薬師参詣に先陣随兵として供奉する
		9月11日	重忠ら、永福寺新造御堂の宿直人に結番される
		11月4日	鶴岡八幡宮神楽あり。重忠ら付歌を歌う
		11月15日	重忠ら鶴岡八幡宮一切経および両界曼荼羅供養に供奉する（鶴岡八幡宮一切経ならび両界曼荼羅供養記案）
		12月2日	重忠ら、御願寺社の奉行人に命じられる
1195	建久六年	2月10日	重忠、上洛供奉人の先陣を命じられる
		2月14日	頼朝上洛のため先陣となり鎌倉を出発。
		3月9日	重忠ら、頼朝の石清水八幡宮および左女牛若宮の臨時祭参向に随兵として供奉する
		3月10日	頼朝、東大寺供養参向のため南都（奈良）に到着する。重忠ら先陣として供奉する
		3月12日	頼朝、東大寺供養に臨席する。重忠ら、先陣随兵として供奉する
		4月5日	重忠、梅尾に参向し、明恵上人に謁する
		5月20日	重忠ら、頼朝の天王寺参詣に先陣随兵として供奉する

西暦	元号	月日	重忠関係の出来事
		6月25日	頼朝、鎌倉へ向けて下向
		7月8日	頼朝、鎌倉へ到着
		この年	重忠が三峰神社に十里四方の土地を寄進し、守護不入の地となす（三峰神社文書）
1198	建久九年	12月27日	稲毛重成が亡妻供養のため相模川に橋をかけこの日供養を行う、頼朝この式に出席し帰途落馬す
1199	正治元年	1月13日	頼朝、重忠に後事を託し死去(53才)
		1月26日	頼家、17才で将軍の跡を継ぐ
		4月12日	将軍親政を排し、十三人による合議制とする
		5月7日	丹波時長、京都から参着し、重忠の南御門宅に移り住む
		6月30日	重忠ら、乙姫の葬送に供奉する
		10月28日	梶原景時の糾弾連署状出さる。重忠、署名す
		12月18日	梶原景時、鎌倉を追放され、翌年正月20日一族討たれる
1200	正治二年	1月18日	重忠、源頼家に碗飯を献じる
		2月2日	重忠、梶原景時の余党勝木則宗の腕を折り、その身を捕らえるのを助ける
		2月6日	重忠、勝木則宗生け捕りのことについて真壁紀内を戒める
		5月28日	葛岡郡新熊野社の社僧、坊領の境相論につき惣地頭重忠に裁決を求める
		7月1日	源頼家、相模河に赴き鶏船を覧る。重忠ら、これに供奉する
1201	建仁元年	6月28日	源頼家、簾中から板額（反乱者）を観る。重忠ら、侍所に群参する
1202	建仁二年	7月22日	頼家、従二位征夷大將軍となる。
1203	建仁三年	8月27日	頼家、病気のため、子一幡に関東二八国の地頭職と守護職を、弟実朝に関西三八国の地頭職を分与する
		9月2日	比企能員、頼家と北条氏打倒を謀り、名腰亭で討たれ、一族も小御所で一幡と共に討たれる。重忠追討軍に加わる
		9月7日	実朝、従五位下征夷大將軍に補される
		11月15日	重忠ら、鎌倉中の寺社奉行に定められる
1204	元久元年	1月28日	重忠が北条時政を破る旨のうわさが京都に伝わる（明月記）
		2月3日	重忠、建仁寺惣門の北に垣を築く（帝王編年記）
		7月18日	頼家(23歳)伊豆修善寺で謀殺される
		10月14日	六郎重保ら、実朝の室を迎えるため京都にのぼる
		11月4日	重保、京都守護の平賀朝雅邸の酒宴で朝雅と争論す
1205	元久二年	1月13日	重忠・重保父子の勘当が解ける（平某書状案、島津家文書）
		6月19日	重忠、菅谷館を出発鎌倉に向う
		6月20日	重保、稲毛重成に招かれ鎌倉に着く
		6月21日	時政、平賀朝雅のざん言により重忠親子も誅することを謀るも、北条義時・時房、重忠を弁護す
		6月22日	この日の朝、重保、三浦義村に油井ヶ浜で討たれる 重忠、二俣川で大將軍義時、時房率いる大軍に襲われ重忠以下134名討死す
		6月23日	義時ら鎌倉に帰る。重忠の無実の死を悲しむ
		7月8日	北条政子、重忠余党の所領を与えられる
		7月19日	北条時政、牧ノ方追放される
		7月20日	義時執権となる
		7月26日	平賀朝雅、京都で討たれる
		9月2日	内藤朝親、新古今和歌集を持参し鎌倉に着く。重忠謀殺などを遅延の理由とする
1210	承元四年	5月14日	重忠の後妻の所領を安堵される
1212	建暦元年	4月2日	かつて重忠が陸奥国長岡郡を知行した記録あり
1213	建保元年	9月19日	重忠の末子僧重慶、日光山別当弁覚に謀反を企てたと訴えられる
		9月26日	重忠末子重慶、長沼宗政のために誅される
1219	承久元年	1月27日	源実朝、八幡宮で公暁に殺され、続いて公暁も三浦氏に切られ源氏の正統絶つ

畠山重忠にまつわるエピソード

1. 重忠の生い立ち

畠山重忠は、長寛2年（1164）に畠山の地に生まれたといわれている。誕生の年については、吾妻鏡の元久2年乙丑（1205）6月22日の条の重忠戦死の記事に、年42（満41）とあることから逆算したものである。ちなみに、この年平清盛は平氏一門の繁栄を願って安芸の厳島神社に法華経（国宝）を納めており、その3年後には自身が太政大臣に補任されるなど、平家政権が絶頂期を迎える時期であった。生誕の地が畠山であったかどうか断定できる記録はないが、父重能が畠山庄司を名乗ってここを本領としていたであろうことから、庄司次郎（庄司の二男の意）を称した重忠が畠山で生まれたとしても不思議ではない。なお深谷市畠山の「畠山重忠公史跡公園」の隣接地にある古井戸を、地元では「重忠公産湯の井戸」と称しているが、その事実を確認することはできない。新編武蔵風土記稿には「城蹟の辺に重忠の井と唱ふる古井二あり」とあるが、これがその中のひとつと考えられる。

2. 重忠の成長

重忠は幼名を氏王丸といい（源平盛衰記）、母は三浦大介義明（神奈川県）の娘（名不詳）である。

治承四年（1180）8月に源頼朝が平家追討の兵を挙げた時には弱冠17歳でありながら、おりから京都に在った父重能に代って一族を率い、大庭景親の求めに応じて平家側に味方して相模国まで兵を進めた。しかし石橋山の合戦に敗れた頼朝が房総に再挙して武蔵に進出した時からこれに従い、以後、頼朝の有力御家人として活躍したことは広く知られているところである。このように史上に著名な重忠であるにもかかわらず、直接重忠に関する確かな史料は皆無にひとしく、その事跡を知るには吾妻鏡（東鑑）をはじめ、平家物語、源平盛衰記、愚管抄、鎌倉年代記や武家年代記の裏書、保暦間記、六代勝事記、明月記、源威集、古今著聞集などの記録によるほかはない。

3. 戦

（1）三浦氏との戦い

治承四年（1180）8月、源頼朝が伊豆に挙兵した際に、重忠は平家側の総大将大庭景親に味方して鎌倉まで出兵したが、頼朝がすでに23日の石橋山の合戦に敗れた後であった。一方、頼朝側に呼応した相模の三浦義明の軍は洪水にはばまれて重忠と同じ様に合戦に遅れ、引揚げる途中の24日、由比浦で両者が遭遇した。その際に些細な手違いから戦いとなり、重忠は郎党50人余りを失って退いた。ついで26日、重忠は秩父一族等の援軍を得て三浦氏の衣笠城を攻め、これに敗れた三浦義澄（義明の子）らは海路安房に逃れたが、ひとり留まった義明（重忠の祖父）は27日、討死した。

これらのことは平家物語や源平盛衰記の「小坪合戦の事」および「衣笠合戦の事」にくわしい。

（2）木曾義仲との戦い

治承四年（1180）8月の段階では源氏に敵対した重忠であったが、頼朝が房総に再起して10

月に武蔵まで進んだ際に、河越・江戸氏らと共にこれに帰順した。

そして元暦元年（1184）正月には、源義経の軍に属して木曾義仲と宇治川で戦った。宇治川合戦における重忠の活躍については、吾妻鏡や平家物語「宇治川先陣」にも述べられているが源平盛衰記の記事が最もくわしい。「高綱宇治川を渡る事」の項に「手勢五百余騎、さと河にぞ打入れ」で「強き馬をば^{かみて}上手に立てて、厲しき流れを防がせよ、弱き馬をば^{ひろ}下手に立てて、ぬるみ（烈しくないこと）に付けて渡すべし」と下知しながら馬いかだを組んで宇治川を押し渡ったことをはじめとして華々しい戦いぶりを述べ、ついで「義経院参の事」の項で、宇治路を破った源義経ら六騎の武者が法皇の院の御所に馳せ参じ、先ず義経が名乗ったのに続いて「青地の錦の直垂に、赤威の鎧を^{ひたれ}着、備前作りのかう平の大太刀帯いたるは、武蔵国の住人秩父の末流、畠山庄司重能が一男次郎重忠、生年二十一と名乗る」と記している。

さらに「巴関東下向の事」のところでは、院の御所から六条河原に引き返して義仲と討ち合い、そのとき義仲の妻巴御前と烈しく渡り合って巴の鎧の袖をひきちぎった怪力ぶりが述べられている。

なお、院に参じた六騎の武者の中には秩父氏一族の河越重房（重頼の子）の名も見える。

（3）平氏追討 ～一の谷～

元暦元年（1184）正月20日の合戦で木曾義仲を討った源氏は、2月5日、平氏を追って播磨国三草山に戦ってこれを破った（三草山合戦）。

吾妻鏡はこの時、重忠は蒲冠者（かばのかじゃ）範頼の軍にあったように述べているが、平家物語・源平盛衰記は、前日に勢揃えがあつて重忠は九郎義経の軍に属したと記している。ついで2月7日、一の谷の合戦が行われた。

その様子について、先ず吾妻鏡は『七月丙寅、寅の刻（午前4時）源九郎を主に先ず殊の勇士七十余騎を引分け、一谷後山（^{ひよどりごえ}鴨越と号す）に着く。爰に武蔵国住人熊谷直実・平山武者所重季等、卯の刻（午前6時）一谷の前路に倫廻し、海道より館際に競い襲い源氏の先陣たるの由、高声に名謁すの間、（中略）悪七兵衛尉景清等、²³廿三騎を引き、木戸口を開らき之と相戦う。（中略）其後蒲冠者並びに足利・秩父・三浦・鎌倉の輩等競い来り、源平軍士等互に混乱し、白旗・赤旗交色、闘戦の体を為し、響山動地、凡そかの^{はんかい}樊噲・^{ちようりよう}張良たりと雖も、たやすく敗り難き^{いねど}績の勢いなり。しかのみならず、城郭石巖高く聳えて駒跡通い難く、爛谷深幽にして人跡すでに絶つ、九郎を主に三郎十郎義連已下の勇士を相具し、鴨越（此の山猪鹿兎狐の外通わざる陰阻なり）より攻め戦はれるの間、商量を失いて敗走し、或は馬に策つて一谷の館を出で、或は船に棹して四国の地に赴く、（以下略）』と記しているが、重忠の記事はない。

また平家物語は「坂落し」の項に、『是を初めとして、秩父・足利・三浦・鎌倉・党には猪俣・児玉・野与・横山・西党・都築党・私（私市）の党の兵共、源平乱れあひ、入かへ、名のりかへおめきさけぶ声、山をひゞかし、馬の馳せちがふ音はいかつちの如し』と、大手にむかった東国武士たちの戦いぶりを述べたあと、義経ら^{からめて}搦手からの坂落しの有様を記しているけれども、その中にも畠山重忠に関する記事は全く見られない。

これらに対して源平盛衰記は、先ず三草山合戦に向う前の「源氏馬揃の事」の項で、『関東の評定には、梶原平三（景時）は侍大將軍にて九郎義経に付き、土肥次郎（実平）は侍大將軍にて蒲冠者（範頼）に相従うべしと定めたりけるに、実平は範頼を捨てて九郎義経に付き、景時は義経を離れて五百余騎を引き分けて蒲冠者に属きにけり。畠山は元は九郎義経に打ち具して宇治川を渡したりけるが、京にては蒲冠者に伴いける。今度一谷へ発向には、畠山又範頼の手を引き分けて、五百余騎にて義経

に付く。其の故は梶原が兵衛佐殿（頼朝）の気色誇りにして諸国の侍どもを手握り、我儘にと振る舞いければ、景時に下知せらるること目ざましく思いける上、蒲冠者の軍将様、九郎御曹司に雲泥を論じて劣り給えりとて搦手にぞ付きにける。九郎義経は、此等が出入りを見給いて「梶原が義経を悪しとて出でたれども、重忠又返り入りたいれば、よしよし利もなく損もなし、同じく五百余騎、武も剛も同じ事なり。されば力はいかにか畠山に並ぶべきなれば、なお替え勝れり」とぞ宣いける』と記して、土肥・畠山が義経につき、梶原が範頼についたいきさつと、義経が「重忠と景時の交換は重忠の方が勝っている」と言ったことを述べている。ついで「義経鵜越を落す並に畠山馬を荷う付馬の因縁の事」の項では、『畠山は赤緘の鎧に、護田鳥（うぐいすのとり）の尾の矢負い、三日月と云う栗毛馬の太く逞しきに乗じたりけり。此の馬鞭打ちに三日の月ほどなる月影の有なければ名を得たり。壇の上にて馬より下り、差しのぞいて申しけるは「爰は大事の悪所、馬転ばして悪しかるべし、親にかかる時子にかかる折と云う事あり、今日は馬を労わらん」とて、手綱腹帯より合わせて、七寸に余りて大いに太き馬を、十文字に引きからげて、鎧の上に搔き負うて、椎の木のだち一本振切り杖につき、岩のはざまをしずしずとこそ下りけれ。東八か国に大刀とは云いけれども、只今かかる振る舞い、人倫には非らず、誠に鬼神のしわざとぞ、上下舌を振いける。（中略）畠山は此の岩石に馬損じてはふびんなり、日頃は汝にかかりき、今日は汝をはぐくまん、と云いける、情深しと覚えたり』と記している。

※蒲冠者（かばのかじゃ）＝源範頼

※七寸に余る馬とは、丈が四尺七寸ある大きな馬。

（４）平氏追討 ～屋島～

文治元年（１１８５）二月、源義経は摂津の^{だいもつうら}大物浦から阿波の勝浦に渡り、更に進んで讃岐の屋島に平家を攻めた。この合戦の間における重忠の事跡として「^{さかろ}逆櫓の論議」で義経と景時が言い争ったとき重忠が景時を抱き止めたこと、暗夜の大風の中を船出するとき義経が一番船、重忠が二番船であったこと、更に「扇的」を射るように命じられた重忠が辞退して、代りに那須与一・宗高を推したこと等が源平盛衰記に述べられている。

しかし平家物語や吾妻鏡どちらにも重忠は登場してこない。

そしてこれ以後、平氏が滅亡する壇の浦の戦まで重忠の名は盛衰記・平家・吾妻等いずれにも見ることはできない。あるいは鎌倉に戻って頼朝の警護にあたっていたのであろうか。

（５）奥州征伐

文治五年（１１８９）頼朝は奥州の藤原氏を討つため、自ら大將軍となって７月１９日に鎌倉を出発した。

その先陣を命じられた重忠は軍夫８０人のうち、３０人には鋤や鍬を持たせた。守る側の藤原泰衡は陸奥国阿津賀志山に城壁をつくり、堀をほってこれに対した。合戦の前夜、重忠は軍夫を使って急ぎこの堀を埋めたのであるが、その様子を吾妻鏡８月７日の記事はつぎのように述べている。

『夜に入り、明曉泰衡の先陣を攻撃す可きの由、二品（にほん＝頼朝）内々老軍等に仰合わさる、仍って重忠を召し相具す所の正夫八十人、用意の鋤鍬を以て、土石を運ばしめ、件（くだん）の堀を塞ぐ、敢えて人馬の煩い有る可からず、思慮すでに神に通ずるか。』

すなわち、鎌倉を出発する軍勢の先頭に鋤や鍬をかつがせてきた重忠の思慮の深さが城郭の堀を埋めるのに役立ち、人馬の進攻がうまくいったのであって「すでに神に通じていたのであったろうか」

というのである。

この戦いでは重忠が、きまりを犯して抜け駆けの先陣争いをしようとした葛西清重等の行動を悠然と見逃してやったこと、捕虜となった敵将・由利維平の取調べにあたって相手の名誉を重んじた扱いをして心服させたことなど、重忠の武将としての見事な風格・資質を思わせる逸話を残している。

（６）比企氏との戦い

建仁三年（1203）8月、将軍頼家が重病になった際に北条時政らの計らいで、関西三十八国の地頭職を弟・千幡（実朝）に、関東二十八国の地頭・総守護職を長男の一番に譲ることにした。

一番の外祖父にあたる比企能員（娘・若狭局は頼家室）は関西三十八か国を弟・実朝に分け与えることを不満として返逆を企てたが、かえって時政にだまし討たれ、和田義盛ら大勢の御家人に攻められて比企氏は滅んだ。

この戦いでは、重忠は比企氏追討の側にまわり、しかもその郎従たちが力を発揮して大活躍したことが吾妻鏡に書かれている。

4. 出会い 重忠と頼朝

治承四年（1180）8月、石橋山の戦いで敗れた頼朝が、10月再び勢いを盛り返して房総から武蔵に進攻して来ると、重忠はこれにつくべきかどうか迷ったようである。

もちろん、まだ父重能や叔父有重らは京都にあって平家に仕えている。8月、頼朝方の三浦氏を衣笠城に攻めて破ったことも、大いに気になる。しかし再起した頼朝の勢力は大きい。

源平盛衰記は、その時決断しかねていた重忠の様子を次のように述べている。

『畠山庄司次郎は、半沢六郎（榛沢六郎成清）を呼びて云いけるは「此の世の中いかが有るべき、つら兵衛佐殿（頼朝）の繁昌し給うを見るにただごとにあらず。八か国の大小名皆帰伏の上は、参るべきにこそあるか。さしたる意趣はなけれども父の庄司（重能）、おじの別当（小山田有重）平家に当参の間、なまじいに小坪坂にて三浦と合戦す。されば参らんも恐あり、参らでもいかが有るべき、相計え」と云いければ、成清申しけるは「ただ、ひらに御参り候え。小坪のいくさは三浦の殿原存知あるらん。弓矢取る身は父子両方に別れ、兄弟左右にあって合戦すること世の常なり。保元の先蹤（せんしょう）近き例なり。且は又、平家は当時一旦の恩、佐殿（すけどの＝頼朝）は相伝四代の君なり。御参り候わんにその恐あるべからず。若し御遅参あらば、一定（いちじょう）討手を差遣わされ候べし、その条ゆゆしき御大事なり。急ぎ御参りあって、何事も陳じ申さるべし」と云いければ、五百余騎を相具して、白旗白弓袋を指し上げて参りたり』。

態度を決めかねていた重忠も、こうして榛沢成清の意見をいれ、重忠と同じ様に逡巡していた河越重頼・江戸重長らとともに、長井の渡しで頼朝に帰伏した。

当初平家方につき、のち頼朝方についた最初のしかも最も有力な武将であった。

一方、頼朝側にあっても、畠山氏の動向は極めて重大事と見ていたようで、隅田川を渡る前に頼朝が「一兩日逗留して上野・下野（群馬・栃木）の武士を待とう」としたのに対し、千葉上総介広常がいうのには「平維盛が大將軍として下向している。しかも武蔵のことをよく承知している斎藤実盛が東国の案内者となって陣を立てている。日数が経てば武蔵・相模の兵は大場・畠山の下知に従って平家方につき、大変なことになりますよ」という意味である。

そこで頼朝は休まず一気に武蔵に進攻したのであった。

重忠は帰伏した際に、案の定、三浦氏を討ったこと、源氏白旗をかかげてきたこと等をきびしく頼朝にとがめられた。

これに対し重忠は「三浦氏を討ったのは些細ないきちがいによることで、いきさつは三浦氏にお尋ね下さい。この白旗は御先祖八幡殿（源義家）から私の四代前の祖武綱が賜り、武衡・家衡を討った際の由緒ある旗で、吉例と名付けて代々相伝してきたものです」と釈明して許された。

しかもその上「頼朝日本国を鎮めんほどは、汝先陣を勤むべし。但し汝が旗のあまりにも取りかえもなく似たるに、是を押せ」といって藍皮一文を賜った。以後、重忠の白旗には、頼朝の旗と区別するために小紋の藍皮をつけたという。

頼朝が、帰順したばかりの十七歳の若武者に武将として最高の名誉である鎌倉入りの先陣を命じたことは、このことによってその帰趨が心配になっていた武蔵武士団を完全に掌握しようとするための措置であったと解される。

5. 京への上洛の先陣

頼朝が行動する際の先陣としてしばしば重忠を用いた。先陣には戦場における「さきがけ」「一番のり」の功名争いの意もあるが、陣立における本陣の「先き備え」の意をもつ先陣があり、武将として最高の名誉であった。

先述した鎌倉入りや頼朝が直接出陣した奥州征伐、その他多くの機会に勤めているが、最高の名誉は建久元年（1190）11月、頼朝が初めて上洛する際の大行列の先陣を命ぜられたことで、重忠27歳の折であった。

吾妻鏡建久元年の条によると、（9月）十六日丁卯、畠山次郎重忠武蔵国より参上、是れ御上洛供奉の為なり。（10月）二日癸未、御上洛の間、先陣の事、御家人等、或いは内々所望を企て、或いは定めて仰付らるの由思い儲ける輩これ多く、而れども日来全く其の沙汰無し。今日畠山次郎重忠を召し仰さる。是れ御存念有るの間、欲して仰付けらるの処、御夢想有るに依る。いよいよ以って思食し定まる、云々。こうして多くの御家人が渴望した御上洛の先陣は、頼朝が御夢想にもとづいて自ら望んで決められたのであった。（11月）七日丁巳、雨降る。午一刻晴に属す。其の後風烈し。二品（頼朝）上洛。法皇（後白河法皇）密々に御車を以って御覧す。見物の車、轂を輾めて河原に立つ。申の刻（午後四時）に入花洛す。三条の末を西に行き、河原を南に行きて、六波羅に到らしめ給う。其の行列、先つ貢金の辛櫃一合次に先陣 畠山次郎重忠 黒糸威の甲を着、家子一人、郎等十人等之に相具す。とあり、ついで先陣の随兵が三騎ずつ六十番まで列が続いたあと、引馬一疋、小具足持一騎、弓袋差一騎、甲着一騎のあとに、折烏帽子、絹紺青丹打ちの水干袴、紅衣、夏毛行騰、梁羽野箭、楚鞆、水豹毛泥障で装った二位家（頼朝）が続き、更に随兵三騎ずつ四十六組の武者、後陣と続く見事な行列であった。重忠に付いた家の子・郎党の中には、重忠の弟たちや近臣の本田近常（親恒）あるいは榛沢成清らの姿もあったものと思われる。

いずれにしても、後白河法皇がひそかに御車の中から御覧あり、都人が大勢つめかけた観衆の中、大行列の先頭に立った若武者・畠山重忠の名誉たるや筆舌に尽くしがたいものがあつたであろうと想像できる。

6. 伊勢の国 沼田御厨 事件

文治三年（1187）の6月には重忠が地頭であった伊勢国御厨の代官が不正を働き、その年9月には重忠は囚人として千葉胤正に預けられ、所領四か所を没収された。

このとき重忠は謹慎のために絶食していたのを胤正の取りなしで許され、菅谷館にこもってしまった。

このことを梶原景時が「重忠謀叛」とざん言したのであるが、下河辺行平らのとりなしで再び頼朝に許されたのであった。

7. 重忠の結婚

重忠ははじめ足立遠元の娘を妻とし小次郎重秀が生まれたが、のち北条時政の娘と結婚した。

時政は頼朝の妻政子の父であり、北条義時の父でもある。頼朝の配慮、また重忠の鎌倉幕府における地位を示すものである。

ただし、重忠は幕政の枢要の役職についたという記録はない。年齢的に若かったことによるものであろうか。

8. 重忠の大力

まず大力であったことは、鶴越の際に馬を背負ったこと、古今著聞集（ここんちょもんじゅう）にある東国一の相撲取り長居と取り組んで長居の肩の骨をくだいたこと、巴御前との鋳引（しころびき）の話、永福寺建立の材木運びで力士数十人の如しといわれたこと、同寺庭池の大石を一人で運び据え、しかも据え直しに大力を発揮したこと、地元・畠山に重忠が投げたという大石があることなどよく知られているところである。

長居との相撲については芭蕉の「昔きけ秩父殿さえすまふとり」の句がある。

9. 重忠の芸術

音曲にすぐれ、文治元年（1186）静御前が鶴岡八幡宮で舞った際に銅拍子を打ったこと、京都に流行した今様を歌ったこと、名馬・生倅（いけずき）のいななきを遠くから聞き分けたことなど、単に豪勇の士でなく深く広い教養のあったことでも知られる。

10. 重忠の信仰心

敬神崇仏の念が厚く、西多摩の武蔵御嶽神社に赤糸威の大鎧（国宝）と太刀を奉納したこと、深谷市畠山の満福寺の堂宇再建等をはじめ県内各地に寺院創建の話が残されている。

11. 陰謀 ～平賀朝雅との軋轢～

元久元年（1204）11月、三代將軍実朝は京都から坊門信清の娘を夫人として迎えることにな

り、その使者として容儀美麗な若武者が選ばれて京都に上ったが、その一行15人の中に重忠の子・重保（母は北条時政の前妻の娘）や、北条時政の子・政範（母は時政の後妻・牧の方）も含まれていた。

ところが旅の途中、一行の中で最も若い政範が病気のために死亡した。

政範は時政の末子で、牧の方にとって唯一人の男の子であった。京に上った若武者たちが平賀朝雅（妻は牧の方の娘）の家で酒宴を開いた際、重保と朝雅との間で烈しい口論があった。一応収まったものの、朝雅は重保に深い遺恨をもち、政範の死も重保が無理をさせたのが原因だなど牧の方に讒言をした。

こうしたことから牧の方は重保および有力御家人である父重忠に深い警戒心を持ち、時政にすすめて畠山氏の追討を計画した。

12. 二俣川の戦い

元久二年（1205）6月22日早朝、時政の命を受けた三浦義村のために重保は謀叛人として討たれてしまった。

これより先、重忠は稲毛重成の「鎌倉に何か起こりそうだ」という報らせによって6月19日に菅谷の館を出発し、6月22日に二俣川（横浜市旭区二俣川）に着いた。

幕府側では重忠が鎌倉に向かったということで北条義時（時政の次男）を総大将として数万の大軍を差し向け、22日昼頃に両者が二俣川で対陣した。

義時は、重忠の誠実な人柄を信じて叛逆などをする道理がないといって畠山氏討伐に強く反対したが、牧の方の再三の強要に従ったのである。

鎌倉の呼び出しに対し、全く叛逆心のない重忠は、たまたま弟の重清・重宗らが不在であったことから二男の小二郎重秀、家臣の本田近常（親恒）、榛沢成清ら僅かに135騎。しかも合戦の準備のないまま、重保がすでに討たれ、数万の大軍が向けられていることを知り、はじめて北条氏にはかられたことを悟った。

本田・榛沢らの近臣は、この際国に帰って陣を立て直すことをすすめたが、重忠は「梶原氏がそれをやったが滅ぼされてしまった。重忠は幕府に異心などないからこそ、進んで討たれても武士の名誉を重んずる」といって聞き入れずに戦い、愛甲三郎季隆の矢に射られて最後を遂げてしまった。年42歳であった。

これらのことについて吾妻鏡は次のように述べている。

『(元久二年六月)廿二日戊申、快晴、寅の刻(午前四時)鎌倉中驚きて遽し。軍兵由比浜の辺に競い走る。誅せらる可き謀叛の輩云々、之に依り畠山六郎重保、郎従三人を具して其の所に向うの間、三浦平六兵衛尉義村仰を奉じ、佐久満太郎等を以て、重保を相囲む処、雌雄を諍うと雖、多勢を破る能わず、主従共誅される云々。又畠山次郎重忠参上の由、風聞の間、路次に於て誅す可きの由、其の沙汰有り、相州(北条義時)已下進発さる。軍兵悉く以て之に従う。仍って御所中に祇候するの輩少なし。(中略)前後軍兵、雲霞の如く、山に列なり野に満つ。午剋(十二時)各武蔵国二俣河に於て、重忠に相逢う。重忠去十九日男衾郡菅屋館を出で、今此の沢に着くなり。折節、舍弟長野三郎重清信濃国に在り、同弟六郎重宗奥州に在る。然る間相従うの輩、二男小次郎重秀・郎従本田次郎近常・榛沢六郎成清已下百三十四騎鶴が峰の麓に陣す。而して重保今朝誅を蒙むるの上、軍兵又襲来の由、此所に於てこれを聞く。近常・成清等云う。聞くに如かば、討手幾千万騎とも知れず、吾が衆更に件の

威勢に敵し難し。早く本所（本領）に退き帰り、討手を相待ちて合戦を遂ぐ可し云々。重忠云う。其の儀然る可からず。家を忘れ親を忘れるは將軍の本意なり。随つて重保誅せられたるの後、本所を顧みる能わず。去る正治の比、景時（梶原）一宮の館を辞し、途中に於て誅に伏す。暫時の命を惜しむに似たり。且つ又兼て陰謀を企つるに似たり。賢察して恥ず可し。尤も後車の誠めと存ず可し云々。

（中略）凡そ弓箭の戦、刀劍の諍い、剋移ると雖も、其の勝負無き処、申斜（午後四時、陽が傾く頃）に及び、愛甲三郎季隆の発する所の箭重忠（年四十二）の身に中る。季隆即ち彼の首を取り、相州（義時）の陣に献ず。しかるの後、小次郎重秀（年廿三、母右衛門尉遠元女）並びに郎従等自殺す。（下略）』

1 3. 畠山一族の滅亡

こうして、誠実無比、頼朝の深い信頼を勝ち得ていた重忠は、北条時政、牧の方の陰謀によって42歳(数え年)にして二俣川に討ち死にした。翌二十三日、北条義時が鎌倉に帰参して時政に報告した状況を吾妻鏡に見る。「廿三日己酉、晴、未剋(午後二時)、相州(義時)已下帰参さる、遠州(時政)戦場の事を尋ね申さる。相州申されて云う、重忠弟親類大略以つて他所に在り、戦場に相従うの者僅かに百余輩なり、然れば、謀叛を企つる事已に虚誕たり、若依讒訴に依つて、誅戮に逢うか、太以つて便からず、斬首を陣頭に持来り、之を見るに年来合眼の昵を忘れず、悲涙禁じ難し云云。遠州仰せらる無きの旨云云。」ところが、酉の刻(午後六時)になると鎌倉中に騒動が起り、三村義村らによつて榛谷四郎・同重季・秀重、稲毛重成などが次々に誅せられた。稲毛重成が「重忠は平賀朝雅に遺恨を持って反逆を企てている」と牧の方に讒訴したのが発端で重忠が横死を遂げたのだという理由によるものであった。こうして嘗ては武蔵の国に強大な力を有した畠山重忠を中心とする秩父一族は北条氏のために次々と葬り去られたのである。そして、同年七月八日、畠山重忠余党の所領は、將軍実朝が御幼稚であつたので尼御台所(北条政子＝頼朝未亡人)の計らいによつて、勲功の輩に分け与えられた。

1 4. 後の畠山氏 ～源姓畠山氏～

重忠が討死した時の室は、北条時政の娘であり、重忠の死後、清和源氏義国流の足利義兼の子義純に嫁した。その際、義純は重忠の旧領を与えられて畠山氏を称するようになり、その後裔である畠山氏は足利將軍に仕えて、斯波・細川両氏と共に三管領の一として室町幕府に重きをなした。

1 5. 重忠の父 畠山重能

秩父郡吉田（旧・吉田町、現・秩父市）を本拠地とする秩父氏の嫡流が、男衾郡畠山の地に進出したのは秩父権守重綱の孫、畠山庄司重能のときとされている。畠山庄については古書にその名称が伝えられるのみで、実態は全く不明であるが、重能の本領が畠山の地であつたことは疑いのないところである。ただし、その開発者が重能であるか、その父重弘か、あるいは祖父重綱か論の分かれるところである。

『重能が畠山庄司を名乗るからには、この地域の開発の時期を一、二代さかのぼらせて考えることは可能である』(安田元久「武蔵の武士団」－その成立と故地をさぐる－)とし「この地を開発したのは、秩父重綱、あるいはその子重弘の時代であつたかも知れない」とされている。ここで重綱の名が

挙げられているのは、畠山の井原神社の縁起の『崇徳院天治年中に重綱当所に移住する砌り、当社五所宮をば勧請し奉り』によるものであるが、この縁起の真偽ははかり難く、重綱の畠山への移住も考えられない。

それよりも、すでに述べたように秩父氏一族の各地への進出、ことに重綱の二子重隆の河越開発、四子重継の江戸進出等と同じ時期に、長子重弘によって畠山の開発が進められ、そこにその子重能が移り住んだとみるのが至当であろう。

ちなみに畠山の地には、前記の縁起を除くと重綱・重弘に関する伝承等は全くない。

重能については、畠山館跡にある「畠山重忠公史跡公園」内の椎の木の根本に自然石の「畠山重能の墓」があり、地元住民の尊崇の対象となっている。

墓としての確証はないものの、畠山の地の開発領主であり、畠山氏の祖となった重能に対する地元住民の崇祖の念の表れであるといえよう。重能の事跡については、吾妻鏡、源平盛衰記、保元物語、平家物語の記事に依るほかはない。

源平盛衰記によれば、久寿二年（1155）大蔵（嵐山町）の戦の後、源義朝の長男・悪源太義平は重能に対し、敗れた源義賢の二男・駒王丸を探して命を絶つように命じた。一度は承知した重能であったが、僅か二歳の子を不愍に思っこの子を助け、斎藤別当実盛（旧・妻沼町（現・熊谷市）長井）に託した。

実盛は、義朝の勢力の強い東国にこの子を置いてはいつか討たれてしまうと考え、母と共に信州木曾の中原兼造に預けて養育を依頼した。この駒王丸が後の木曾義仲である。

保元物語によれば、保元の乱（保元元年－1156）で、長男義朝と平清盛の連合軍に敗れた源為義が、長男である義朝の情にすがって降服しようとした際に、八男・為朝はこれを諫め「何とかして坂東におもむき、この合戦に参加しなかった三浦介義明、畠山庄司重能、小山田別当有重らと語って再起を期したい」と強く主張したという。

これによってみても、重能、有重兄弟の軍事力が、為朝に深く信頼されるほど大きかったことを知ることができる。

このように源氏に属し、しかも深い信頼をうけていた重能であったが、平治の乱（平治元年－1159）に源義朝が敗れて源氏の命脈が中断すると平氏に仕えるようになり、内裏や院の御所を警固する京都大番役などにも勤仕するようになった。

乱の翌年に武蔵国が平氏の知行国となり、平知盛が武蔵守に任ぜられたこともあって、武蔵総検校職を勤める重能としては当然その支配を受けざるを得なかったのであろう。

また、武蔵における在地武士団の棟梁とすれば、自らの在地支配のためには、新しい政権の担い手であり全国の「武士の棟梁」である平氏に服従するほか選ぶ途がなかったのであろう。

平家物語によれば、寿永二年（1183）5月21日、重能・有重の兄弟は加賀国篠原で、都に攻めのぼる木曾義仲の精鋭・今井四郎兼平と対戦、炎天下で双方それぞれ三百騎が入り乱れて戦い、互いに多くの家の子、郎党を失って退いた。

やがて木曾義仲は平氏を追って京都に入り、平氏は同年7月都落ちを余儀なくされた。

その時にあたって重能・有重の兄弟は、すでに東国において重忠が源頼朝に従うようになったので首を斬られるべきところを、平知盛の進言を受け入れた平宗盛に許され、東国へ下るよう暇を賜った。

その際、2人は西海までも平氏の供をするように願ったが「汝等が魂は皆東国にこそあるらん、ぬけがら斗西国へめしぐすべき様なし、いそぎ下れ」と許されなかった。やむなく2人は涙を押えて東国へ下ったという。

なお、吾妻鏡では宗盛に進言して重能等を助けたのは平貞能であったとしている。

こうして平氏を離れた重能兄弟のうち、弟の小山田有重の名はその後の吾妻鏡の記事にも見えるので頼朝の御家人になったことは明らかであるが、兄・重能の消息については全く不明である。

吾妻鏡にも平家物語・源平盛衰記にもその名が見えず、頼朝に仕えたかどうかすらも明らかでない。平氏に長く仕えた重能を頼朝が疎んじたのか、重能が平氏の重恩を肝に銘じて頼朝に仕えなかったのか。

いずれにしても、後事を全て重忠にまかせてしまったとしか思えない。もちろん重能の没年等も不詳である。

16. 畠山氏の祖先 秩父氏と畠山氏

深谷市民をはじめ埼玉県民が誇る偉人「畠山重忠」は秩父氏の一族である。

秩父氏は、村岡五郎と称した桓武平氏の平良文の孫、平将恒（将常）にはじまる。

将恒は武蔵権守となり、秩父郡中村郷（秩父市）に本拠を置いて中村太郎を称し、秩父地方を開いて秩父氏の基礎を築いた。その子武基は秩父牧（古代から秩父郡内にあった牧で、皆野町野巻の地域という説、秩父盆地北部の旧・吉田町一帯という説、長瀬町岩田の地域とする説がある）の別当となり、この時から秩父氏を称したものと思われる。

その子・武綱は秩父十郎といい、後三年の役に源義家に従い、武功をたてて白旗を賜った（源威集）。

そして武綱の子重綱は武蔵国留守所総検校職に任ぜられたが、重綱の孫重能のときに畠山に移って畠山氏を名乗った。

その重能の子が畠山庄司次郎重忠で、重綱より重忠に至るまで代々武蔵国総検校職に補任された秩父氏の嫡流である。

秩父別当武基の弟武常は武蔵国豊島郡・下総国葛飾郡に進出し、その子孫が豊島氏および葛西氏を名乗ってそれぞれの地域において武士団を形成した。

また重綱の弟基家は相模国渋谷庄に進出し渋谷氏の祖となった。

秩父権守重綱の第二子重隆は、入間郡河越庄の在地領主としてここに居を構えて、河越氏の祖となった。その女は源義朝の弟、帯刀先生義賢に嫁したが、当時、義賢は上野国多胡郡多胡庄を本拠地として武蔵国にも進出し、比企郡大蔵に館を構えた。

しかるに義賢の兄である義朝は鎌倉を本拠に相模・下総を固め、更に武蔵にも勢力をのばそうとして両者が衝突して大蔵館の合戦となったが、義賢は義朝の長男悪源太義平に敗れ、これに味方した重隆も討たれた。

その際、畠山重能は義朝について戦った。重隆が討たれたことでこれ以後秩父氏一族は全て源氏の嫡流である源義朝に従うことになった。重隆の孫が河越重頼である。

重綱の四男・重継は武蔵国荏原郡の江戸郷に進出し、江戸氏を名乗ってここを本拠地とした。その子が江戸太郎重長である。

畠山重能の弟、有重は小山田別当と称して武蔵国南多摩郡小山田庄（東京都町田市）を本拠に勢力を伸ばし、その子重成は武蔵国橘樹郡稲毛庄の在地領主となって稲毛三郎を称し、その弟である重朝は榛谷御厨の在地領主となって榛谷四郎を名乗った。このように秩父氏一族は、秩父権守重綱・秩父太郎大夫重弘・畠山庄司重能・畠山庄司二郎重忠とつながる嫡流を中心に、これと近い関係にある河越・江戸・小山田（稲毛・榛谷）等の諸氏および庶流にあたる豊島・葛西の両氏を含めて武蔵国の各

地に地歩を固め、相模の三浦氏、下総の千葉氏に匹敵するような強力な勢力をもつようになった。

12世紀の前半期の頃であった。

なお、武蔵国総検校職については、吾妻鏡によれば嘉禄二年（1226－重忠の死後）に河越重頼の子重員が武蔵留守所総検校職に補せられた際に『秩父出羽権守以来、代々補来云云』の記事があり、「代々」を重綱から重員に至る代々をとれば、重綱から二男の重隆へという河越氏の流れとなる。事実、重員の父・河越重頼が秩父氏の棟梁とされた時期もあるらしいのでこの説も一概に否定できない。

しかし、同じ吾妻鏡寛喜三年（1231）の条には重員が『本職四カ条は秩父権守重綱より畠山二郎重忠に至るまで奉行し来る』といている。あるいは重綱から長男重弘さらに畠山氏へと受け継がれたが、重能・重忠父子の頃に一時期河越重頼が補任されたことも考えられる。いずれにしても、秩父氏主流が代々この職に補されたことは事実といてよく、秩父氏一族は各地に独立的地域支配を実現しながら、棟梁を中心に同族的結合を維持して武蔵国において最も強大な武士団となっていたのであった。

17. 家臣 本田氏

畠山重忠のあるところ、影が形に添う如くその名が見えるが本田近常（親恒）と榛沢成清であった。

本田氏は本田家系図（本田瑛男家文書）によれば、畠山氏と同じく桓武平氏の村岡良文の流れをくむ。即ち中村太郎を称した平将恒の兄弟の平忠恒（忠常）は上総介・下総権介として両総に多くの私営田を所有したが、長元元年（1028）に反乱して征討された。しかしその子孫は両総を支配し、忠恒の子常将の子孫が千葉氏を名乗り、千葉介常胤のときに頼朝の再挙に功劳があった。常将の弟恒親は安房押領使となり安房国長狭郡穂田郷に住み、穂田氏を称したらしい。

その恒親の孫親幹が武蔵国男衾郡本田郷に住み移り本田氏の祖となった。

親幹の曾孫親正は太郎を称し、宇治川の合戦で討死したことになるが詳細は不明である。

親正の弟が重忠と常に行を共にした第一の近臣・本田近常（親恒・親常）で幼名は鬼石丸、二郎を称した。

本田（親恒）の名が初めて史書に見えるのは、源平盛衰記の「小坪合戦の事」の項である。

源頼朝が伊豆に挙兵した石橋山の合戦のとき、平家方（大庭景親）についた重忠が合戦に遅れて鎌倉由比ガ浜に在陣中、頼朝方につきながら同じ様に合戦に間に合わなかった三浦義明の軍と遭遇し「頼朝方についた三浦党の和田義盛だが、平家方についた畠山が押し留めるなら留めてみよ」と大声で名乗った際、重忠が本田・半沢（榛沢）に「三浦に遺恨はないが、一矢も報いず通すわけにはいかない」といって両者が戦ったことは前述した。

戦況が不利になった重忠（十七歳）が血気にはやって一騎打ちをかけようとしたところ、本田・半沢が中に入り「さきに申す如く、大形（三浦方のこと）も御一門、近くは三浦大介殿は祖父、畠山殿は孫に御座す、離れぬ中なり。さしたる意趣なし、我執なし、私の合戦其の詮（理由）なく覚ゆ。本田・半沢に芳心ありて、御馬を返し給え」と言ったので、和田は「郎等の降を乞うわ、主人の云うにこそ、今は引け」と両者が相別れたという。

これ以降の合戦記には重忠とともに「本田・半沢」の名が暫々見えるが、いずれも本田二郎近常（親恒）・榛沢六郎成清のことで、殆んど両者の名は併記されており共に重忠の最も信頼する側近であった。近常（親恒）の戦功は平家物語に見ることができる。即ち巻第九の中「落足」の項に、『小松殿（平重盛）の末子、備中守師盛は、主従七人小舟にのっておち給う所に、新中納言（平知盛）の侍、清衛

門公長といふ者馳来ツて「あれは備中守殿の御舟とこそ見まいらせ候へ、まいり候はん」と申ければ、船を汀にさしよせたり、大の男の鎧きながら、馬より舟へがはと飛のらうに、なじかはよかるべき、舟はちみさし、くるとふみかへしてンげり、備中守うきしづみしぬ給ひけるを、畠山が郎等本田次郎（親恒）、十四五騎で馳来り、熊手にかけてひきあげ奉り、遂に頸をぞかいてンげる、生年十四歳とぞ聞えし。』とある。

実はこの記事が、畠山重忠が鴨越に加わっていなかったという論拠の一つになった。

一の谷の合戦記録が鎌倉に届けられた中に『去る七日一谷において合戦す。平家多くもって命をおとす。前内府（平宗盛）已下は海上に浮かびて、四国の方へ赴く。本三位中将は之を生虜る。又通盛卿・忠度朝臣・経俊・経正・師盛・教経（中略）此外梟首する者一千余人、およそ武蔵・相模・下野等の軍士、おのおの大功をつくす所なり、追って注記言上すべし、うんぬん』とある。

もちろん蒲冠者や遠江守義定とかいう指揮官が自らこれ等の人を討ったのではなく、部下の功績である。

これによれば平家物語のいう如く平師盛を打ち取ったのが本田近常（親恒）ならば、近常（親恒）は安田遠江守義定の軍中にあった筈で、近常（親恒）の主人・畠山重忠も当然のこととして安田義定の麾下にあったと考えられる。しかも義定は源氏の一族で搦手の大將軍になる資格は充分にあり、重忠等がその指揮下にあったとしても不審ではない。

こうした記録から、源平盛衰記以外には根拠のない「重忠の鴨越え」の話は事実ではなく、傑出した武将・畠山重忠を称賛する美談として語られたものであると考えられる。

18. 本田氏と島津氏

文治二年（1186）島津忠久（島津家始祖）は九州の日向・薩摩・大隈三州の地頭職に任ぜられ、同年秋、薩摩国山門院（出水郷）の木牟礼城に入った。これに関して鹿児島県国分市の郷土史は次のように記述している。

この下国に当っての最大の功労者が本田氏の祖、本田近常（親恒）であった。辺境の地に赴任するに当って、その地の情勢を知ることが必要であった。そのために、本田近常（親恒）が先発隊となって薩摩に入った。近常（親恒）が薩州に入ると土着の豪族は一斉に起って中央支配に拒否の態度を見せた。近常（親恒）は老体をさげて東奔西走、戦うこと二十数回に及び、一応山門院付近の平静を確保した上で忠久の入国を迎えている。近常（親恒）はもとは畠山重忠の宿将であり、近常（親恒）の娘が畠山重忠の室となり、その娘が忠久の室となった関係で忠久の入国に当って特に重忠から援助を命ぜられたのであろう。近常（親恒）は自ら奔走した上に、忠久の入国にはその子の貞親を随従させ、貞親もまた父の意を体して終始よく忠久を補佐し、後には大隈国の守護代を命ぜられ国分の清水に居館を構えるに至った。

以来、清水は本田氏の本拠となり、国分平野の中心として重きをなした。

島津忠久は源頼朝の庶長子で、母は比企能員の妹の丹後局であるが頼朝の妻北条政子の嫉妬を恐れて西国に逃げ、摂津国住吉神社の境内で夜間雨の中狐火に守られて誕生、偶然のことから近衛家の庇護を受けて近衛家の家司惟宗広言の養子となり、畠山重忠が烏帽子親をつとめたといわれる。

忠久夫人が重忠の娘であったことは「寛政重修諸家譜」に「畠山重忠の女を妻とす」とあるのをはじめ、ほぼ定説となっているが、その母については国分市の郷土史の如く本田近常（親恒）の娘とする説や、足立遠元の娘とする説がある。また本田瑛男家系図のように近常（親恒）の実子を重忠の養

女にして忠久に嫁したのだとの説があるが、いずれも真とも判じ難い。

近常（親恒）の子・貞親については、「幼名氏石丸、二郎、左衛門尉、入道して静観」（本田瑛男家系図）さらに「小二郎、初重季、実畠山次郎重忠末子、母加紀屋」とあり、近常（親恒）と共に下向し、近常（親恒）が武蔵に帰国した後も忠久の重臣として功績があり、その子孫が、薩摩・日向・大隈地方にあって活躍した本田諸氏である。（国分市史・入来町史・宮之原研著書等による）。

近常（親恒）は重忠と共に二俣川の戦いで討死し、貞親が九州に移ったあとは、先述した近常（親恒）の兄親正の後を貞親の子・道親（太郎、入道して道観）がつぎ、この系譜が深谷市（旧・川本町）の本田氏である。（本田家系図）。

19. 家臣 榛沢氏

榛沢六郎成清は武蔵七党のひとつと称される丹党の一族で、父・成房の時に榛沢（旧・岡部町）に住んで榛沢氏を名乗った。成清の母は重忠の乳母であったから、重忠とは乳兄弟の関係にある。

平治の乱では畠山重能に従って出陣した。のち重忠に仕え、重臣として本田近常（親恒）と共に並び称される功績をあげ、二俣川の戦いで討死した。

深谷市の後榛沢には榛沢氏館趾と伝えられる地があり、榛沢六郎供養塔がある。

荒川の鶯の瀬にまつわる重忠の話は、この成清館からの帰途の出来事と伝えている。（岡部六弥太館からの帰途の折だという説もある）。

重忠ゆかりの地

No.	ゆかりの地	種別	県名・市町村名 ・字/地名	説 明
1	我野神社(アガノジンジャ)	神社	埼玉・飯能・南	棟札に建久2年、頼朝が戦勝を祝賀し畠山重忠に当社の再建・造営を命じたと伝わる。周辺に岡部六弥太にちなむ場所が多い。
2	阿津賀志山(アツカシヤマ)	戦場	福島・国見・一	奥州征伐のおり、阿津賀志山の要害の戦闘に先立つ夜、畠山重忠が用意してきた鋤鍬による軍夫80人に土や石を運ばせ、堀を埋めて攻撃を優位に導いた。重忠の準備の良さを示す一例である。福島県伊達郡(国指定史跡)
3	争いの杉(アラソイノスギ)	木	東京・北・田端	北区上田端八幡神社にある白髭神社は、今の田端中学にあった神社でその付近の畑に「争いの杉」と呼ばれる神木があった。木の高さは二丈五尺(約8.3m)余り、幹の太さは九尺(約3m)位で、遠くから望むと松の木にも見えたという。奥州討伐に向かう途中の重忠が、これを見て松の木か杉の木かと家来と争ったという伝承から「争いの杉」という名称で呼ばれるようになったという。
4	有馬山(アリマヤマ)	山	埼玉・飯能・名栗	有馬山は、重忠が実は討死をせず、しのび隠れたところで、後に土佐に行ったという話がある。
5	安楽寺(アンラクジ)	寺	東京・青梅・下成木	頼朝が重忠に弘法大師が彫刻をした愛染明王像を納めさせたという。
6	井棕神社(イグラジンジャ)	神社	埼玉・深谷・畠山	満福寺の北に位置する。畠山氏進出時に秩父郡吉田町にある棕神社(式内社)を勧請したと伝えられる。棕神社は代々の秩父の守り神として尊敬されていて、井棕神社も畠山氏の守護神であったと推定される。
7	石井家(イシイケ)	子孫 伝承	千葉・長柄・金屋	重忠子孫。
8	伊豆山神社(イズサンジンジャ)	神社	静岡・熱海・一	建久2年(1191)2月4日、重忠が頼朝に随行する。
9	出雲伊波比神社 (イズモノイワイジンジャ)	神社	埼玉・毛呂山・一	鎌倉時代の建久年間に源頼朝が重忠に奉行をさせて本殿を檜皮葺に造営し、神領も寄附したと伝えられる。重忠も陣太刀・産衣の甲を寄進したという。
10	井田氏(イダシ)	子孫 伝承	東京・府中・是政	是政村の旧家百姓左衛門は井田氏で、重忠の四男四郎左衛門重政はその家臣久米川新七郎に伴われ三河国額田郡井田村に隠れたという。
11	一ノ谷古戦場 (イチノタニコセンジョウ)	戦場	兵庫・神戸・一	平氏追討のために一ノ谷まで進軍した義経が、平氏の陣営を背後から攻めるために鶴越を逆落とし急襲した。そのときに愛馬をいたわるために馬を背負って急峻な崖を下りたと伝えられる。この戦いで郎党本田近常が平重盛の末子師盛を討ち取ったとされる。
12	岩清水八幡宮 (イワシミズハチマングウ)	神社	京都・京都・八幡	建久元年(1190)11月11日、建久6年(1195)3月9日に重忠が頼朝に随行する。
13	鶯の瀬(ウグイスノセ)	伝承	埼玉・深谷・畠山	地元に伝わる話によると「重忠が郎党の榛澤成清の館へ行った帰り豪雨となり、川が増水して、荒川を渡れないで困っていたところ、どこからか一羽の鶯が飛んできて美しい声で鳴きながら浅瀬を教えてくれたので無事川を渡ることが出来た」と伝えられる。渡河が済んだ重忠が「時ならぬ 岸の小笹の うぐいすは 浅瀬たずねて 鳴き渡るらん」と詠んだと伝えられる。井棕神社北の荒川で、六堰頭首工の下流に当たる。(深谷市指定名勝)
14	宇治川古戦場 (ウジガワコセンジョウ)	戦場	京都・宇治・一	元暦元年(1184)に木曾義仲討伐のため源義経軍に付き従い京に攻め上った。逆巻く濁流渦巻く宇治川を渡河する際、重忠が馬を下り徒歩で渡ろうとしたところ、流されていた烏帽子子の大串重親を岸にほうりあげたという。また義仲の家子の長瀬重綱を馬から引き落として首をねじきったという。重忠の怪力ぶりが伝えられる逸話である。
15	馬の足跡(ウマノアシアト)	伝承	埼玉・寄居・小園	うぐいすの瀬の上流3km位の荒川右岸の立岩という大きな石がある。この岩に馬の足跡のような穴が交互にあいている。重忠が乗馬で坂を上る練習をした時の跡だという。
16	馬の休み場(ウマノヤスミバ)	伝承	埼玉・飯能・吾野	伝説では正丸峠の麓吾野に、重忠が愛馬をいたわった馬の休み場と呼ばれるところがある。
17	永光寺(エイコウジ)	寺	石川・羽咋・酒井	曹洞宗、畠山一族の墓と称する石塔が残る、岡部六弥太忠澄一族の菩提寺と伝わる。
18	永代寺(エイダイジ)	寺	埼玉・狭山・柏原	一説によると文治元年(1185)に畠山重忠が創立したといわれる。
19	永福寺(エイフクジ)	寺	埼玉・さいたま・領家	永福寺にある五輪塔は重忠の墓、また水判土の庄は重忠の旧領と伝わる。
20	江ノ島(エノシマ)	随 行	神奈川・藤沢・一	寿永元年4月5日、重忠が頼朝に随行する、弁財天に祈願する。

21	円乗院(エンジョウイン)	寺	埼玉・さいたま・与野	与野の円乗院は重忠の開基と伝えられ、浦和の道場から移ったものの説もあり、銅鐘にその由来が書かれている。
22	延命寺(エンメイジ)	寺	東京・青梅・成木	重忠の草創と伝えられる
23	円融寺(エンユウジ)	寺	埼玉・秩父・下影森	臨済宗、秩父札所 26 番観音で、観音堂を秩父太郎重弘が再興し、その子、さらに孫の重能、重忠も観音を篤く信仰して栄えたという。
24	大関城址(オオゼキジョウシ)	城館	千葉・東金・依古島	『上総国誌』によれば、元久元年(1204)、畠山重忠の支族が安房国から上総国に移り、重康の代に大関城を造営した。大永 6 年(1526) 12 月、攻められて大関城は落城、重康は自決し畠山氏は滅亡したといわれる。(市指定文化財)
25	大血川(オオチガワ)	川	埼玉・秩父・大滝	重忠生誕伝説があり、大蛇から生まれたといわれている。
26	大槌村(オオツチムラ)	伝承	岩手・大槌・一	重忠の長男、畠山重高のゆかりの地
27	大淵寺(オオブチテラ)	寺	埼玉・秩父・下影森	秩父第 27 番観音、畠山重能の開基と伝わる。
28	驚神社(オドロキジンジャ)	神社	神奈川・横浜・青葉	神社の名前は、馬を大切にす意味から馬を敬う「驚」がついたと云われる。社前は旧鎌倉街道に当り、源頼朝の重臣・重忠が驚神社を篤く崇敬したことも伝えられる。
29	生川(オボッカワ)	川	埼玉・横瀬・一	重忠がこの辺で生まれたので、生川と呼ぶという。
30	貝吹松(カイブキマツ)	木	神奈川・横須賀・荻野	貝吹松は、和田義盛と重忠が合戦した時、陣貝を吹いた旧跡という。
31	隠れ穴(カクレアナ)	伝承	神奈川・横浜・旭	二俣川の合戦で重忠を矢で討ち取ったのは、愛甲三郎季隆といわれる。この穴は季隆が、重忠を討つために隠れていたと伝わる。
32	駕籠塚(カゴヅカ)	墓	神奈川・横浜・旭	六ツ塚から緩やかな坂を登った二俣川古戦場が見渡せる高台に「駕籠塚」がある。二俣川の合戦が始まったとの急報を受けた重忠の内室「菊の前」が駆けつけたところ、すでに重忠は戦死していた。「菊の前」は重忠の戦死を悲しみ自害して果てた。ここに駕籠ごと埋葬されたことから駕籠塚と呼ばれるようになったと伝えられる。現在は小さな塚の上に祠がまつられてある。以前は隣接地に大きな塚があり、昭和 49 年に今のかたちになった。
33	香指神社(カサシジンジャ)	神社	千葉・鴨川・太海	重忠がここに住んで双子の娘をもうけた。この双子に因んだ神社と伝わる。(民話浜波岡波として伝わる)
34	金沢(カネサワ)	伝承	埼玉・皆野・金沢	畠山氏にゆかりのある皆野町には、金沢という地名が残る。横浜市にある金沢文庫長の関靖氏が書いた「かねさハ物語」では、金沢区釜利谷付近との関係を指摘し、この付近で皆野町金沢出身の人が畠山氏ゆかりの馬具(武蔵鐙)をつくっていたと推定している。釜利谷には重忠ゆかりの遺跡が多く残り、この地が領地であったとも伝えられる。釜利谷には武蔵鐙の残る東光寺、皆野町金沢には西光寺が残ることも何かの縁かもしれない。
35	鎌倉(カマクラ)	都市	神奈川・鎌倉・一	幕府の所在した鎌倉には、重忠の屋敷跡や重忠が造営奉行をした永福寺などの史跡がある。
36	鎌倉街道(カマクラカイドウ)	道	埼玉・深谷・畠山	鎌倉街道上つ道は鎌倉と本庄市児玉地区をつなぎ、「いざ鎌倉」と馬をとばす幹線道路であった。畠山館跡の西 1km に鎌倉街道荒川渡河地点の赤浜の渡しが有り、台地から川においてゆく堀割状の遺構が良く残る。(深谷市指定史跡)
37	川浦温泉(カワウラオンセン)	温泉	山梨・山梨・三富川浦	重忠発見の湯。鎌倉時代、重忠が参勤の途すがら当地に宿営した折、腹痛を起こし、その時にみた薬師如来の霊夢により「薬師之湯」が発見されたと伝えられる。
38	感応寺(カンノウジ)	寺	鹿児島・出水・野田町	島津家の初代忠久から 5 代の墓所で、畠山・本田両氏の墓があると伝わる。
39	蒲原神社(カンバラジンジャ)	神社	新潟・新潟・中央区	畠山重忠の弟・重宗夫妻の姿をかたどった木像が伝わる。
40	木古庭不動尊(キコバドウソン)	寺	神奈川・葉山・木古庭	葉山町には、重忠が三浦氏との戦いに戦勝を祈願したため、身代わり不動といわれている木古庭不動が畠山城の対岸に有る。また、本尊の地藏尊が畠山地蔵と呼ばれる長徳寺もあつた。(現在、長徳寺は廃寺となり、地藏は近くの仙光院に移されている。) 逗子市との町境付近が三浦氏との最初の合戦の地、小坪であり、重忠との深いかわりを感じさせる。
41	鬼鎮神社(キジンジンジャ)	神社	埼玉・嵐山・川島	畠山重忠が菅谷館築造のとき、うしろ(東北)の鬼門除けとして祭ったと伝えられる。
42	衣笠城(キヌガサジョウ)	城館	神奈川・横須賀・一	治承 4 年 8 月、重忠が三浦義明らを攻める。
43	キャラ木(キャラボク)	木	埼玉・さいたま・常盤	畠山一族が秩父にあった先祖の墓所に植えたと伝わる伽羅の木が、ビルの谷間の緑地であるさいたま市常盤公園に残っている。この伽羅は、数奇な運命をたどり、明治初期に秩父の墓所から大宮の富豪によって旧浦和地方裁判所(現常盤公園)の前庭に移植されたものと云われる。この名木は、かつては盛んな樹勢を誇っていたが、現在は本木が衰え、周辺に新たに根を付けたものが現存している。深谷市にもこの伽羅から挿し木をしたものが、重忠公園の墓所と川本出土文化財管理センターに移植してある。

44	旧家秀三郎系図 (キュウケヒデサブロウケイズ)	子孫 伝承	埼玉・秩父・吉田、 阿熊	旧家秀三郎所蔵の「秩父系図」には、重保の子重利とその子孫の事 などがみえる。
45	京都御所(キョウトゴシヨ)	随行	京都・京都・一	建久元年(1190)11月9日、重忠が頼朝に随行する。
46	金鶏神社(キンケイジンジャ)	神社	埼玉・川越・山田	昭和8年6月、畠山重忠の命日に当たり重忠祭を行ったのを機会 に、重忠を産土神として祭祀した。後に埼玉県嵐山町菅谷から現在地 へ遷座。
47	葛岡城(クズオカジョウ)	城館	宮城・大崎・岩出山	奥州征伐後、葛岡郡(現大崎市内)を所領として賜り、葛岡城を築き、 弟重宗を移住させたといわれる。
48	首洗い井戸(クビアライド)	戦場	神奈川・横浜・旭	帷子川沿いに重忠の首を洗い清めたといわれる直径1mほどの井戸 があった。
49	熊野神社(クマノジンジャ)	神社	宮城・大崎・古川嵯 峨	文治5年(1189)、源頼朝平泉征伐の後、畠山重忠がこの地を領し、隆 慶という僧社務を司る。(社伝)その後修験本覚院これに代わる。
50	鞍川(クラカワ)	伝承	富山・氷見・一	畠山にある「満福寺」「龍宮寺」の住職が氷見から歴代赴任した。
51	建仁寺(ケンニンジ)	寺	京都・京都・東山	正治元年(1199)、鎌倉で寿福寺を建立した僧栄西は、将軍頼家が深 く帰依したため、建仁2年(1202)東山綾小路の河原の地に建仁寺を 開山した。造営は重忠等がその工事を助け、元久二年(1205)に竣工 した。
52	恋ヶ窪(コイガクボ)	伝承	東京・国分寺・恋ヶ 窪	重忠は鎌倉往還の途次、この地に寵愛した夙妻(あさづま)太夫という 遊女があり、義経に従って西国へ平氏追討の任に就いたが、重忠討 死のうその報せに太夫は嘆き悲しんで街道脇の姿見の池に投身した という。戦場から戻った重忠は、遊女の節操を憐れみ、菩提のために 阿弥陀堂を建立し、鉄仏を鑄て安置したという。窪地の東福寺境内に 遊女の墓碑があり、二代目の傾城ヶ松が植えられている。
53	小久保家墓地(コクボケボチ)	墓	埼玉・小川・上古寺	土峯山の伝畠山重忠墓を守ってきた小久保家の墓地には重忠の祖 父重弘の弟、重遠の墓石が残されている。重遠が、先に高山三郎と称 し、上古寺に移って小久保晏閑入道と称し、小久保家の始祖になって いる。二俣川の戦いの後、重慶は上古寺の重遠を頼ってきて、重忠の 遺髪を埋葬し、五輪塔を築き菩提をとむらったと伝えられる。その後、 都幾山慈光寺に登り、剃髪して慈光寺二十七世の別当になったと言 われる。
54	小坪の戦い(コツボノタカイ)	戦場	神奈川・鎌倉・小坪	由比ヶ浜の東端、鎌倉と逗子との境に位置する。
55	ごはん塚(ゴハンツカ)	墓	神奈川・横浜・緑	元久2年(1205年)6月、畠山重忠は北条義時の策略にあい鶴ヶ峰 の合戦で敗れた。逃げ延びてきた家来たちは、現在鴨居七丁目にあ るこの高台で食事をしていたところ、追っ手の北条氏の攻撃を受け、こ の付近で全滅した。なかからは村人によってこの地に葬られ、攻められ たときに食事をしていたことから「ごはん塚」と呼ばれるようになったとい う。
56	小町神社(コマチジンジャ)	神社	神奈川・厚木・泉町	丹後の局が政子夫人の怒りにふれて処刑されそうになったとき、重忠 が小野の里にあった川上酒匂の屋敷に丹後の局をかくまった。局は 心労で白髪になってしまったため、小野神社に参拝したところ美しい 黒髪に戻ったと伝えられる。
57	駒繁石峠(コマツナギイシトウゲ)	峠	東京・八王子・上川	別名を網代坂、または山田峠越えともいう。八王子市上川町閑場から あきる野市網代に抜ける坂道で、古くは秩父街道と結ばれていた鎌倉 街道の山の道であったという。重忠が馬を繋いだといわれる岩(あきる 野市)があり、これが峠の名の由来という。現在は、街道の面影はな い。
58	駒繋ぎの樺 (コマツナギノケヤキ)	木	埼玉・長瀬・下郷	天満神社にあるという。
59	駒繋ぎの杉(コマツナギノスギ)	木	東京・青梅・成木	常福院の境内にある。重忠が馬をつなぎ止めたという大木。
60	駒止桜(コマドメサクラ)	木	静岡・富士宮・一	建久4年(1193)5月8日、富士の巻狩のおり、重忠が馬をつないだ とか、重忠が植えたといわれる伝説の桜の木がある。この近くに、重忠の 陣所が置かれたという。
61	小宮氏(コミヤシ)	子孫 伝承	神奈川・川崎・今井	ここにある館跡は重忠の一族小宮筑後入道重康が住んだところであ る。橋樹郡今井村、現中原区今井西町。
62	小屋の台(コヤノダイ)	城館	東京・杉並・堀之内	奥州征伐の際、重忠が陣をとったところ。
63	金剛院(コンゴウイン)	寺	埼玉・秩父・下吉田	秩父武綱の開基。重忠の位牌がある。
64	金剛寺(コンゴウジ)	寺	埼玉・さいたま・道場	金剛寺は重忠の草創による。また、その正観音は重忠の念持仏。足 立郡道場村。

65	境石投踊並笛 (サカイイシナゲオドリナラビニフエ)	踊り	埼玉・深谷・藤沢	境地区に伝わる。この踊りは矢尽き、刀折れ、ついに地に落ちた自然石を敵に投げつけた様子を表すという。歌舞伎の石投げの見得が取り入れられ、笛は畠山重忠が伝えたといわれている。笛の長さは二尺五寸から三寸ぐらい、直径は一寸から一寸五分という大きなものである。(市指定文化財)
66	さかさ矢竹(サカサヤダケ)	伝承	神奈川・横浜・旭	重忠が討ち死にする直前に「我が心正しければ、この矢に枝葉を生じ繁茂せよ」と、地面に刺した2本の矢が根づいたという。年々2本ずつ生えてくるのでこの名がついたという。今では見る事が出来ない。周辺に重忠の「首塚」、「首洗い井戸」、「鎧の渡し」、「片割れしどめ」などが川に沿って点在する。
67	佐助稲荷神社 (サスケイナリジンジャ)	神社	神奈川・鎌倉・一	神社の縁起によると、源頼朝が伊豆の蛭ヶ小島に流されていたとき、ある夜翁が現れ、「早く兵を起こして平氏を討滅し、天下を統一せよ。私は鎌倉鎮座の神である」といって励ました。頼朝は鎌倉に入ると、稲荷の神霊に感謝して、佐介山隠里(さすけやまかくれざと)の地を選び、重忠に社殿を造らせたと伝える。
68	産川(サムカワ)	川	神奈川・海老名・門沢橋	産川は佐牟加波とよんで、郡の西上今泉村から出る川であるが、この名は重忠の娘、護王妃が、ここで生まれたから名付けたという。
69	重清領有地 (シゲキヨリウユウチ)	伝承	群馬・南牧・一	弟重清の落居地と伝わる。
70	重清領有地 (シゲキヨリウユウチ)	伝承	長野・上田・畑山	重清領有地という。
71	重忠首塚(シゲタダクビツカ)	墓	神奈川・横浜・旭	小さな地藏堂があり、2mほどの多重塔が建っている。重忠の兜を埋めたところと伝わり別名「兜塚」という。
72	重忠供養塔 (シゲタダクヨウトウ)	墓	神奈川・横浜・金沢	東光禅寺内にある五輪塔、重忠を供養したものと伝わる。
73	重忠駒繫ぎの松 (シゲタダコマツナギノマツ)	木	埼玉・秩父・一	諏訪大神社にある。
74	重忠城址(シゲタダジョウシ)	城館	埼玉・さいたま・道場	浦和の道場には、重忠の居館と伝えられる場所があり、近くには館にちなむ堀の内、宿や町屋などの地名が残る。ただし、現在痕跡は残っていない。また、重忠が土中から拾い上げた観音像を祀る道場を開いたことが地名の由来といわれ、金剛寺がその道場であると伝わる。足立郡道場村の城址
75	重忠の沓跡 (シゲタダノクツアト)	伝承	山梨・山梨・一	秩父街道によるものなのか、詳細は不明。
76	重忠橋(シゲタダバシ)	橋	東京・八王子・上川	田守神社のそばの川口川に架かる橋は重忠橋と呼ばれる。
77	重忠屋敷(シゲタダヤシキ)	城館	東京・町田・小山	多摩郡小山村、小名片所は、重忠屋敷ともいう。
78	慈光寺(ジコウジ)	寺	埼玉・ときがわ・平	慈光寺は、坂東第9番札所で、鎌倉幕府に手厚く庇護を受け隆盛した天台宗の寺院である。慈光寺27世の住持嚴耀は重忠の大伯父である。重忠の三男重慶が、上古寺の小久保家をたよった後、慈光寺に入り住職となり、父重忠の菩提を弔ったとも伝えられる。また、観音堂には重忠の念持仏であったと伝わる十一面観音菩薩立像は、像高八尺余で重忠の身長と同じ180cmといわれる。
79	慈勝寺(ジショウジ)	寺	東京・あきる野・下草花	重忠の伯母にあたる金寿院理体大尼の開創と伝えられる。畠山重忠の位牌あり。
80	四天王寺(シテンノウジ)	寺	大阪・天王寺・一	建久6年5月20日、重忠が頼朝に随行する。
81	忍草浅間神社 (シボクサセンゲンジンジャ)	神社	山梨・忍野・忍草	建久4年8月6日、重忠と和田義盛が神前随神門を建立寄進したと伝えられる。神社は、忍野浅間神社(オシノセンゲンジンジャ)とも称される。
82	鷲窟山観音院 (シュウクツザンカンノンイン)	寺	埼玉・小鹿野・飯田	秩父観音霊場31番の鷲窟山観音院は小鹿野町の観音山中腹に建立されている。重忠が狩りに来たとき、何度矢を射てもはね返される鷲の巣の中から正観音を見つけたという。これは将門の乱で行方不明になった行基作の観音像といい、本田次郎近常(親恒・親常)に命じて観音堂を建立し祀ったといわれている。他にも重忠が馬を休ませたという「馬の足跡岩窟」や重忠が本田次郎近常に命じて向いの山の岩穴めがけて射させたという「矢抜けの穴」などの伝説が伝わる。
83	上行寺(ジョウギョウジ)	寺	富山・富山・楡原	鎌倉時代の非運の武将・重忠が落ちのびてきた時に建立したという真言宗の法雲寺を改宗して、応永16年(1409)上行寺を建立した。重忠が、捕えた犀の角を自ら刻み、兜の中におさめて出陣したと伝えられる三埴明王や、重忠の位牌、鎧などが残る。
84	常住寺(ジョウジュウジ)	寺	群馬・下仁田・一	重忠の孫、重快開基といわれる。

85	承天寺(ジョウテンジ)	寺	山梨・忍野・内野	建久4年(1193)、鎌倉往還建設の普請奉行として当地にきた重忠がこの寺を定宿としたおり、時の住職に帰依、堂宇の整備につとめ、仏像などを寄進した。現在、寺の本尊の薬師如来像はその時のものと伝えられる。
86	浄土寺(ジョウドジ)	寺	神奈川・横須賀・西 逸見町	鎌倉初期、重忠の創建と伝え、古くは天台宗、天正年間の改宗した。
87	常福院(ジョウフクイン)	寺	東京・青梅・成木	武蔵御嶽神社の北にあり、高水山の山頂(標高640m)のすぐ下に常福院不動堂という山岳寺院がある。重忠が建久年間にこの寺を再興した伝えられ、重忠奉納の太刀が残っていたという。
88	浄法寺城(ジョウボウジジョウ)	城館	岩手・浄法寺・一	重忠の末裔(三男重慶)が移り住み浄法寺氏の祖になったと伝えられ、館跡が残る。
89	鐘楼塚(ショウロウヅカ)	伝承	神奈川・横浜・旭	幕府の伝令のため鐘楼を設けた場所。重忠が持っていた観音像を埋めたという言い伝えがあり、別名「観音塚」といわれる。
90	陣岡(ジンオカ)	戦場	岩手・紫波・一	重忠が由利維平を尋問した奥州征討の幕府側の陣。
91	真光寺(シンコウジ)	寺	埼玉・ときがわ・玉 川、日陰	慈光寺の尾根沿いに、玉川村日陰にある真光寺が所在する。日陰の集落から約10分の急坂を登ると茅葺きの大きな本堂と、左側の石段を登ったところに観音堂がある。この寺は、重忠の開基と伝えられる。真光寺の慈眼山拈花院の院号と、慈光寺の拈華山靈山院の山号が同じであることや、観音堂の本尊が千手観音像で、重忠公念持仏の十一面観音像がある慈光寺観音堂の本尊も千手観音像であることなどに慈光寺と共通する一面を見いだせる。現在は無住の真光寺は、湧き水が豊富で、本堂前の池に水蓮が満開に咲いている。
92	真福寺(シンブクジ)	寺	埼玉・秩父・山田	秩父札所2番。本尊は重忠の守本尊と伝わる。
93	菅谷神社(スガヤジンジャ)	神社	埼玉・嵐山・菅谷	当社は畠山重忠が、武運長久の守護神として建久元年(1190)、近江の日枝神社を勧進し「日吉山王大権現」と称した。明治4年に、日枝神社、さらには菅谷神社と名称変更した。現在、重忠も祭神に加え祀られている。
94	菅谷館(スガヤヤカタ)	城館	埼玉・嵐山・菅谷	都幾川を望む要害の地、嵐山町菅谷に重忠の館跡が残る。鎌倉時代に作られた「吾妻鏡」に重忠末期の地二俣川に出発したのは「菅屋の館」と記されている。元服後に、畠山館から鎌倉街道沿いで交通の便が良い菅谷の地に進出したものと考えられる。現在残る城は戦国時代に造られた城館であるが、重忠の像が建てられ、敷地内の県立歴史資料館に重忠展示コーナーが設けられている。
95	すずり石水(スズリイシミズ)	伝承	神奈川・横浜・旭	重忠が鶴ヶ峰に布陣したとき湧き水で墨をすったと伝えられる。
96	住吉家(スミヨシケ)	子孫 伝承	富山・富山・楡原	源頼朝の愛妾であった丹後の局が鎌倉で殺されそうになったとき、重忠の機転により難を逃れることが出来た。その恩を感じた丹後の局は鎌倉方に疎まれた重忠が旧・細入村の楡原にいと聞き及び、はるばる訪ねたが、すでに重忠は亡くなっていた。その後墓前に庵をつくり、供養したと伝わる。住吉家は丹後の局の子の子孫といわれる。
97	諏訪神社(スワジンジャ)	神社	岩手・久慈・長内町	文治5年(1189)、源義経追討の将畠山重忠の創建と伝わる。
98	清泉寺(セイセンジ)	寺	群馬・下仁田・下仁 田	重忠の弟重俊大僧都の開基で今から約750年前の後堀河天皇の御代に兄重忠の菩提を弔うために現在地に開山したと伝わる。
99	清泉寺跡(セイセンジアト)	寺	埼玉・秩父・吉田、 夏梅	重忠の弟長野重清の開基という。
100	正八幡社(セイハチマンシャ)	神社	東京・八王子・上川	重忠建立と伝えられる。
101	正法寺(セイホウジ)	寺	埼玉・ときがわ・一	正法寺にある鏡面の千手観音は重忠の守本尊。
102	清来寺(セイライジ)	寺	神奈川・横浜・旭	江戸時代末期、19代住職の曾我宥快が畠山重忠の武勇をたたえるため、近在の人々に呼びかけ「夏野の露」と呼ばれる巻物を作成し伝来する。
103	青蓮寺(ショウレンジ)	寺	茨城・常陸太田・東 連地	重忠の第2子重秀は、重忠が殺された元久2年(1205)に出家して恵空と号して父の墓をたずねて常陸の国に巡ってきた。たまたま当山の太子堂に泊まって太子の夢を見、太子のお告げに感じて親鸞の弟子になり、法号を性証と改めた。親鸞に従って再び当山を訪れたとき、太子堂をはじめ、境内がひどく荒れはてていたので、建保6年(1218)に師弟力を合わせて境内を浄め、堂宇を建てて浄土真宗の寺としたと伝えられる。 その後、性証は青蓮の夢を見、寺号を青蓮寺と改めたという。
104	浅間神社(センゲンジンジャ)	神社	埼玉・秩父・荒川	詳細不詳。
105	善明寺(ゼンミョウジ)	寺	東京・府中・一	天台宗、大國魂神社の別当寺で重要文化財の阿弥陀如来像2体が残る。体内仏は畠山重忠が夙妻太夫のために鑄造したものと伝えられ、建長5年に1丈2尺の大鉄仏の体内に納めたという建立の次第が「金仏阿弥陀如来の由来」に記される。

106	禪龍寺(ゼンリュウジ)	寺	奈良・五條・西吉野町	重忠が頼朝から拝領した涅槃大曼荼羅を孫重氏が寄贈したという。重氏は重忠菩提のため梵鐘を建立したという。近くに畠山一族の古墓があり、「畠山一族会」により供養されている。
107	総持寺(ソウジジ)	寺	埼玉・長瀬・本野上	畠山重忠開基と伝わり、残る位牌に重忠の法名を重忠院殿竜岳雲公とする。秩父郡本野上村。
108	曾我八幡宮(ソガハチマンガウ)	神社	静岡・富士宮・一	社伝によると、建久8年(1197)、源頼朝が曾我兄弟の孝心に感じ重忠を遣わし、兄弟の英魂祭らせたと。兄弟は相殿として祭られ、兄弟の像は、重忠が丹波法眼に命じて刻ませた像だといわれる。
109	即清寺(ソクセイジ)	寺	東京・青梅・柚木	即清寺は愛宕山明王院即清寺と号し、真言宗豊山派に属す。建久年間、源頼朝がここの本尊に帰依し、重忠に命じて山の麓にこの寺を、山頂に愛宕神社を再建させたという。ここには重忠の位牌が伝わっており、元久2年没の銘が残る。また寺名は戒名の「勇讃即清大禪定門」よりとったものと伝わる。本堂は明治37年に焼失したが、現在は見事な本堂、仁王門が再建されている。門前をとおりる道は秩父への鎌倉街道といわれ、往時の景観が偲ばれる。
110	大威徳寺跡(ダイイトクジアト)	寺	岐阜・下呂・一	征夷大將軍となった頼朝の命により創建されたと伝わる寺院。岐阜県指定史跡「鳳慈尾山大威徳寺跡」。境内に重忠寄進と伝えられる秩父杉の切り株が残る。
111	大泉寺(ダイセンジ)	寺	群馬・邑楽・一	重忠6代子孫篠塚伊賀守のゆかりの地と伝わる。
112	大陽寺(タイヨウジ)	寺	埼玉・秩父・大滝	大陽寺の阿弥陀三尊は重忠の守本尊。鎗1本は重忠の手鎗という。
113	平重能墓(タイラシゲヨシボ)	墓	埼玉・皆野・皆野	平将門が開基したと伝わる円福寺に重忠の父親平重能の墓と伝えられる五輪塔が残る。墓地に将門の弟、平将平の五輪塔とともに皆野町指定文化財として保存される。五輪塔は江南町付近で産出する凝灰岩製といわれ、大里地方との関連を推定されている。なお重忠公園にも自然石からなる重能の墓が残る。円福寺のある場所は、荒川と赤平川の合流地点にあり交通の要所といえ、すぐ近くに皆野の掠神社がある。
114	高千穂神社(タカチホジンジャ)	神社	宮崎・高千穂・一	源平合戦の後、九州に勢力を伸ばした鎌倉幕府が、もとの平家の領地を支配するため多くの御家人を守護・地頭として九州に送り込んだ。そのころ重忠が高千穂神社を訪れたことが神社に伝わる古文書に残る。「文治四年壬四月(1188)天下より御名代ちちふ様(重忠)十社大明神(高千穂神社)に参詣」と記されている。源頼朝に命ぜられ、九州の地の支配が安定しているか探るために訪れたと考えられている。本殿前に重忠が植えたといわれる「秩父杉」が聳えている。
115	田野畑村(タノハタムラ)	伝承	岩手・田野畑・一	平泉から逃れた義経を追う畠山重忠が残した鎧を祀る神社とか、義経が渡った川の位置を指して一の渡、二の渡の地名が残る(田野畑民話)。平成9年から川本町(現深谷市)と友好町村交流を行っている。
116	玉川神社(タマガワジンジャ)	神社	東京・羽村・羽中	寿永年間に重忠の一族により諏訪大社より勧請された神社と伝えられる。
117	田守神社(タモリジンジャ)	神社	東京・八王子・上川	重忠が鎌倉行軍中、兜の鉢に納めていた守り本尊を紛失し、そののちこの本尊を田の守護神として神社に祭ったという伝えがある。また、神社のそばの川口川に架かる橋は重忠橋と呼ばれている。
118	秩父氏館跡 (チチブシヤカタアト)	城館	埼玉・秩父・下吉田	畠山重忠の先祖は代々秩父の出身で、重忠の父、重能がはじめて深谷市畠山に進出したと伝えられる。秩父郡吉田町には、埼玉県指定旧跡「秩父氏館跡」が残る。そこが秩父氏の本拠地といわれ、重能が生まれた場所と伝えられる。吉田川に面した館跡は、三方を崖に囲まれた要害の地で、現在は吉田小学校の敷地で、川の対岸に秩父氏ゆかりの掠神社が臨める。館の遺構は残らないが、校庭の片隅にその由来を示す案内板が立ち、往時の姿をしのばせている。
119	秩父神社(チチブジンジャ)	神社	埼玉・秩父・番場	今の秩父神社に宗近の太刀を奉納した。このほか、長柄の鉾も重忠の奉納という。重忠が合祀されている。
120	秩父杉(チチブスギ)	木	岐阜・下呂・一	大威徳寺跡に、重忠寄進と伝える秩父杉の八畳間ほどの切り株跡が残る。『飛騨国中案内』に、境内に桜の木2本、銀杏の木1本を秩父重忠、和田義盛等が植えたとある。
121	秩父杉(チチブスギ)	木	宮崎・高千穂・一	「秩父杉」は、源頼朝の代参で重忠が訪れた際に植えられたものと伝わる。高さ55m、目通りの太さ9mの巨木で、本殿の前に聳えている。根元を5mほど埋め立ててあるとのこと。昔はさらに高さを誇っていたものと考えられる。高千穂町文化財に指定され、一時樹勢が衰えたときに樹木医により治療され、現在でも木の中ほどに鉄製のタガがめぐらされている。以前は隣にもう一本の巨大な杉があったが台風により倒れた。現在境内に建つ立派な神楽殿はその材木により立てられたという。(町指定文化財)
122	秩父塚(チチブツカ)	墓	大分・由布・庄内	半澤家は、畠山重忠の末裔と伝承する。重忠愛用の太刀「雲切丸」を世襲していたと伝えられる。

123	長慶寺(チョウケイジ)	寺	埼玉・東松山・一	真言宗。重忠の菩提寺で鎌倉時代には菅谷館のそばにあったと伝わる。現在の東昌寺。重忠の位牌が伝わる。
124	長徳寺(チョウトクジ)	寺	神奈川・葉山・長柄	白田山長徳寺の本尊地蔵は、高さ5尺、運慶作で、重忠の守護仏という。現在、長徳寺は廃寺となり、地蔵は近くの仙光院に移されている。
125	築館(ツキダテ)	城館	秋田・由利本荘・矢島町築館	畠山重忠の馬草地。築館そのものはその名の示すごとく館として構築されたといわれ、「八幡寺縁起」によれば、畠山重忠が矢島地方を馬草領地として統治の際、築館に代官所を置いたといわれる。この地由利郡は、由利維平の領有地。
126	妻坂峠(ツマサカトウゲ)	峠	埼玉・横瀬・一	秩父の武甲山から続く山並みに妻坂峠と呼ばれる峠がある。この峠は秩父郡横瀬町から入間郡名栗村に向う街道として昔はよく使われていたという。この峠の名前は、秩父に住んでいた重忠の妻が見送りにこの峠まで来たとか、この峠を越えた名栗村で重忠と落ち合ったとか、そこから妻の坂という地名が付けられたと伝えられる。重忠公生誕伝説の残る横瀬町生川からつづらおりの山道を登ると広々とした峠にたどりつく。そこから秩父市街が木立の合間から望むことができる。
127	鶴岡八幡宮 (ツルガオカハチマングウ)	神社	神奈川・鎌倉・一	鶴岡八幡宮は鎌倉幕府にゆかりの深い神社である。本殿前の石段の脇には、公暁が3代將軍実朝を討つために隠れていたという大イチョウが残る。石段を下りたところに静御前が舞ったと伝えられる舞殿がある。文治2年、追われる義経を慕いつつ頼朝の命令で舞をまった逸話は有名である。このとき重忠が静御前の舞にあわせて銅拍子を打ったといわれる。
128	寺津ヶ淵(テラズガフチ)	伝承	富山・富山・細入	狭い谷の中に位置する細入地区には、重忠の伝説がある。頼朝の命令により「犀の角」の煎薬を手に入れるため、神通峡の寺津ヶ淵へに赴いた重忠は、格闘の末、犀をしめ角を得ることに成功した。鎌倉に戻り頼朝へ届けたところ効果が表れず返された。残念に思った重忠はその角で「三帰明王」という仏像を刻み、兜の中に収めて戦ったという。その像は現在、上行寺の寺宝として伝わる。
129	天楼台(テンロウダイ)	寺	神奈川・川崎・菅	法泉寺東南の寺院を天楼台といい、これは、雑色の雲が空になびいたのを見て、重忠が「これ星宿にあらず、天楼台の現るるなるべし」と言ったからという。現多摩区菅。
130	東光禅寺(トウコウゼンジ)	寺	神奈川・横浜・金沢	臨済宗。釜利谷地区は重忠の領地であったと伝えられ、重忠開基と伝える東光禅寺に供養塔と重忠愛用の馬具(鞍)が残される。
131	東大寺(トウダイジ)	寺	奈良・奈良・一	重忠は、東大寺再興に際して、頼朝から増長天像の造営奉行を命じられる。
132	堂平山(ドウタイラサン)	山	埼玉・東秩父・一	堂平山の頂上に鐘楼を作ったと伝えられる。
133	常磐(トキワ)	城館	東京・青梅・成木	重忠が一時居住したという。
134	豊島館(トシマヤカタ)	城館	秋田・秋田・河辺戸島	戦国時代の豊島玄蕃の居城といわれ、城の構えは荘大で、県内でも名を知られた城跡である。文治5年(1189)、河辺太郎なる者が館主となったといわれるが、館の完成は永正3年(1506)、畠山重忠の一族、豊島玄蕃が常陸の国からこの地に入ってからと伝えられる。
135	轟城(トドロクジョウ)	城館	栃木・日光・轟	重忠の末子重慶が住んだと伝わる轟城は、台地先端の要害の地に立地し、一辺80mの正方形の範囲が堀と土塁で囲まれる。二俣川合戦の後、日光山麓に逃れていた重慶が、建保元年(1213)、日光別当の弁覚により謀反ありと幕府に密告され、建保5年に長沼宗政に討たれたときに居城したと伝えられる。なお、重慶はその難を逃れ、慈光寺に入山したとの説もある。
136	富澤家(トミザワケ)	子孫 伝承	東京・多摩・落合	富澤家は重忠13代の後裔が政が富澤姓をとらえたという。その子孫は江戸時代の名主で、その富澤家住宅が現在も移築・保存されている。
137	長井の渡し(ナガイノワタシ)	伝承	東京・荒川・長江	頼朝に重忠がはじめて拝謁したところ。浅草との説もあり詳細な場所不明。
138	如意輪寺観音堂 (ニョイリンテラカンノドウ)	寺	埼玉・さいたま・鹿手袋	如意輪寺観音堂の本尊は、重忠尊信の霊仏。足立郡鹿手袋村。
139	沼田御厨(ヌマタノミクリヤ)	領地	三重・いなべ・北勢	地頭に畠山重忠が補任されていたが、文治3年(1187)に重忠の眼代内別当真正が「員部(弁)大領家綱」所従等の宅を破却、資財を奪い取ったため、家綱の訴える所となり重忠は身柄を拘禁、所領を没収された。北勢町にある沼田御厨のことと思われる。
140	根古屋城(ネゴヤジョウ)	城館	埼玉・横瀬・横瀬	秩父別当武光、十郎武綱、重綱、重弘、重能まで五代にわたり居住したと伝わる。
141	野口家(ノグチケ)	城館	東京・日ノ出・平井	馬継の亭長野口氏の宅は、重忠の旅館となったところ。
142	箱根神社(ハコネジンジャ)	神社	神奈川・箱根・一	建久2年2月4日、重忠が頼朝に随行する。
143	長谷観音(ハセカンノン)	神社	神奈川・鎌倉・長谷	長谷観音にある勢至菩薩像は、安阿弥の作で、重忠の持仏堂の本尊と言い伝わる。「新編鎌倉志」にも同じことが書いてある。

144	畠中氏(ハタケナカシ)	子孫 伝承	石川・加賀・山代温 泉	畠中氏の祖、畠中重成は重忠と平宗盛の娘宗姫の間に生まれた子と 伝わる、その後山代の地に移り住んだと伝わる。
145	畠山一族落居地(ハタケヤマイチゾ グラッキョチ)	伝承	長野・佐久・一	畠山一族落居地。
146	畠山館跡(ハタケヤマカンセキ)	城館	埼玉・深谷・畠山	重忠が誕生したと伝えられる館跡で重忠墓を始めとする6基の五輪塔 が残る。「新編武蔵風土記稿」に土塁や井戸が残ることが記され、現 在も伝産湯井戸が現存する。館内には深谷市指定文化財の嘉元二 年(1304)銘の板碑や重能墓と伝えられる自然石が残る。また、鶴越え での重忠の勇姿を表した銅像が建立され、「昔きけ 秩父殿さえ すま ふとり」と重忠を詠んだ芭蕉句碑もある。館北側から薬研堀が発見さ れ、その北側から大型の火葬墓が検出され、火葬場と考えられる。
147	畠山重忠邸 (ハタケヤマシゲタダテイ)	城館	神奈川・鎌倉・雪ノ 下	鎌倉幕府に仕える御家人の畠山重忠は、鎌倉にも居を構えた。「吾妻 鏡」が幕府の南御門付近にあったと伝え、「新編鎌倉志」は筋替橋の 西北が屋敷跡と伝える。鶴岡八幡宮の東の鳥居を出ると目の前に「畠 山重忠邸」の石碑が立っている。鎌倉市雪ノ下にあるこの場所は幕府 の所在地に近い一等地で、重忠の鎌倉幕府における重要な立場を示 すものといえる。
148	畠山重忠乗り上げの岩(ハタケヤマ シゲタダノリアゲノイワ)	伝承	埼玉・寄居・三品	白髭神社の傍らに、周囲 15m、高さ 5mほどの巨大な岩石があり、「畠 山重忠乗り上げの岩」と伝わる。
149	伝畠山重忠墓 (ハタケヤマシゲタダボ)	墓	埼玉・小川・上古寺	比企郡小川町は鎌倉時代には畠山と同じ男衾郡であった。小川町大 河地区の上古寺に、伝畠山重忠墓が残り、土峯山(標高 293m)の頂 上に低い塚を築き、祠の中に据えられている。高さ 76cm の凝灰岩砂 岩製の石造物で、平面六角形の笠を特徴とし、中台には蓮弁が施さ れている。土地では昔からここを「権現塚」あるいは「六郎庄司塚」とも 呼んでいる。祠前の緑泥片岩製の石碑にその由来が記され、祠を守 ってきた麓の小久保氏が明治時代に建立したものである。登山口に は慈光寺の経堂を小久保氏が再興したと伝えられる高福寺が位置す る。
150	畠山重忠墓 (ハタケヤマシゲタダボ)	墓	埼玉・深谷・畠山	畠山重忠公史跡公園にある木立に囲まれた覆屋の中の大型五輪塔が 「畠山重忠」の墓と伝わる。高さ 169cm で凝灰岩製の大型品であ る、他に同様な大型の五輪塔が 5 基残っている。五輪塔の下部から は方形の石組が検出されている。宝暦 13 年に満福寺に移され、明治 17 年 10 月、元の現在地に戻された。(埼玉県指定史跡)
151	畠山重忠墓 (ハタケヤマシゲタダボ)	墓	埼玉・さいたま・神田	永福寺の境内に五輪塔があり、畠山重忠の墓と伝わる。五輪塔の地・ 空輪に宝篋印塔の笠がかけられている。ゆかりの地がさいたま市周辺 に残るのは重忠がこの地を領地としていたことによるのかもしれない。 深谷市から荒川を使えば遠い距離でもなく、船を使って鎌倉までの中 継場所かもしれない。ただし、重忠がこの地を治めていたことを示す記 録は残っていない。
152	畠山重忠墓 (ハタケヤマシゲタダボ)	墓	埼玉・飯能・大六天	飯能市の天覧山の麓に畠山重忠の墓と伝わる本郷大六天の板石塔 婆がある。二俣川で戦死した重忠の遺骸を、秩父に向けて運んでい た車が、「飯能の車返しの坂」に差し掛かったとき、急に動かなくなっ た。そこで従者が重忠の靈魂の意志を汲みとり、この地に遺骸を葬っ たものと伝えられる。民家の狭い路地を入り込んだ小さな神社裏の大 きな白樫の木に、板石塔婆が食い込んで残っている。高さ 1.5m の 2 本の板石塔婆が並んで立ち、飯能市指定文化財となっている。道路 から案内標識もなく、その位置はわかりにくい、昔は高麗川沿いの 秩父へ向かう街道の(以降文章が無い)
153	畠山重忠墓 (ハタケヤマシゲタダボ)	墓	富山・富山・楡原	楡原には畠山重忠墓と伝わる五輪塔が残る。5m 四方の塚の上にいく つもの小型五輪塔が立っている。塚の隣には八幡宮が鎮座し、この周 辺は「楡原館」と呼ばれる中世の城跡である。毎年 7 月下旬に五色の 旗を立てて重忠の菩提を弔う。
154	畠山重保墓 (ハタケヤマシゲヤスボ)	墓	神奈川・鎌倉・雪ノ 下	鶴岡八幡宮から由比ガ浜までの間に一の鳥居がある。その西側に重 忠の長男六郎重保墓と伝わる宝篋印塔が残る。明徳 4 年(1393)の銘 があり、高さ 3.45m と見上げるほどの偉容を誇っている。ここは俗に六 郎様と呼ばれ、「せき」の病に功ありとして参詣者が竹筒にお茶を入れ て奉納する風習がある。この周辺は、重保の館があったと伝えられ、塔 の西方を畠山屋敷といいつたえ、重保の旧宅であろうという。新編相 模風土記稿では「今土人この伝を失う」とある。
155	畠山城(ハタケヤマジョウ)	城館	神奈川・葉山・木古 庭	治承 4 年(1180)、源頼朝の挙兵を鎮圧するため平家方で出兵した 17 歳の重忠は、母の実家の三浦氏と戦うことになった。衣笠城を攻め るときに陣を張ったのが葉山町の畠山城である。重忠方の大勝利に終 わり、三浦義明は打たれた。城址は小名を畠山といい、畠山六郎重保 の城址とも伝えられる。

156	畠山神社(ハタケヤマジンジャ)	伝承	岩手・田野畑・大芦	建久年間に畠山一族が現在の田野畑大芦に移住したと伝えられ、その際、自らの守護神「桑形八幡大明神」を勧請し、同時に鹿島鹿踊りを習い伝えたという。「武蔵あぶみ」をご神体とする畠山神社は重忠ゆかりの一族をまつた神社と伝わる。菅窪鹿踊りは「五三ノ桐」の家紋の鞍掛けを腰に下げている。
157	畠山神社(ハタケヤマジンジャ)	神社	熊本・上天草・松島町	「畠山さんが勇ます」という伝承があり、祭礼時に相撲を奉納する。
158	鉢形城(ハチガタジョウ)	城館	埼玉・寄居・鉢形	重忠居城説がある。
159	八幡宮(ハチマンガウ)	神社	東京・国分寺・恋ヶ窪	夙妻太夫が植えたと伝わる傾城ヶ松が植えられたという。
160	八幡社(ハチマンシャ)	城館	東京・杉並・和田	奥州征伐の際、重忠が陣をとったところ。
161	八幡神社(ハチマンジンジャ)	神社	秋田・由利本荘・矢島町築館	『出羽国風土記』(明治17年・荒井太四郎著)によると「八幡神社は城内築館に鎮座す。応仁元年畠山庄司郎築館に住し当社を氏神となす」。
162	八幡大神社(ハチマンダイジンジャ)	神社	埼玉・秩父・坂本	八幡社は、建久年間、重忠の創建で、時雨桜は重忠の手植という。現在、境内には重忠お手植えの銀杏と樟の木が残っている。
163	八幡塚村(ハチマンツカムラ)	城館	東京・大田・八幡塚	荏原郡八幡塚村、六郷の渡し付近を重忠居住のところとする。現南大郷3丁目。
164	ババア神様祠(ババアカミサマホコラ)	神社	埼玉・秩父・荒川白久	重忠の乳母がここで行き倒れになって亡くなり、それを哀れんでここに祀ったという。別名「オバッコ」「乳母塚」という。風邪の神様として信仰される。
165	比石館跡(ヒシカンセキ)	城館	北海道・上ノ国・石崎	嘉吉元年(1441)下北の田名部から渡道した畠山重忠の一族で厚谷右近将監重政の築いたものという。長禄元年(1457)のコシヤマインの戦いでこの館は落ち、討死にした重政は館下の急流に身を沈め、大鯨に化身し、早川の主になったという。
166	日金山東光寺(ヒガネサントウコウジ)	寺	静岡・熱海・伊豆山	真言宗。寺に安置された高さ1丈の銅造の地藏尊は、源頼朝の勧請により畠山重忠が鑄たと伝わる。
167	日向薬師(ヒナタヤクシ)	寺	神奈川・伊勢原・一	日向山霊山寺と称す。建久5年8月8日、重忠が頼朝に随行し、大姫の治癒を祈願する。
168	碑文谷八幡神社(ヒモンヤハチマンジンジャ)	神社	東京・目黒・碑文谷	重忠の守護神を家臣筋の宮野左近という人がここに祀ったのがその起源という由緒ある神社である。八幡社の銅製の御神体は、重忠の守本尊で、軍陣に臨むとき兜立物につけたといわれる。本殿右側に重忠の臣榛沢六郎を祀った稲荷神社がある。
169	平糠館(ヒラヌカヤカタ)	伝承	岩手・一戸・平糠	重慶が、浄法寺に向かう途中立ち寄ったといわれる。
170	武甲山(ブコウサン)	山	埼玉・横瀬・一	秩父の名峰武甲山の頂上に鎮座する御嶽神社の縁起には、重忠が民の豊穰を祈り、宗近の太刀等を奉納したことや、重忠と梶原景時が源頼朝の命により神果の応驗をたずねたことが記載されている。秩父盆地にそびえ立つ武甲山は、畠山一族にとってもゆかりの深い山岳で、麓には横瀬町生川や秩父氏居城といわれる根古屋城、秩父札所26番円融寺などのゆかりの地が分布する。
171	普済寺(フサイジ)	寺	埼玉・深谷・普済寺	普済寺の開基岡部六弥太忠澄の妻は重忠の妹。寺の近くに岡部六弥太の五輪塔が残る。
172	二俣尾(フタマタオ)	戦場	東京・青梅・二俣尾	重忠戦死の地と伝えられる。
173	二俣川古戦場(フタマタガワコセンジョウ)	戦場	神奈川・横浜・旭	二俣川古戦場は、元久2年6月22日に重忠が末期の戦いとなった古戦場である。現在は擁壁され当時の面影はないが、畠山重忠の慰霊碑が建つ。周辺には鎧の渡しや首洗い井戸が有り、重忠首塚に石塔が残る。重忠最期の地として知られる二俣川は、幅の狭い河川で、鶴ヶ峰駅付近で帷子川と合流し横浜港に注ぎ込む。相鉄線二俣川駅は鶴ヶ峰駅のとなりで、周辺に万騎ヶ原と呼ぶ北条方の陣があったと伝える地名が残っている。
174	船迫(フナバサマ)	戦場	宮城・柴田・一	重忠が和田義盛と恩賞を争った奥州征討の幕府側の陣。
175	平沢寺(ヘイタクジ)	寺	埼玉・嵐山・平沢	菅谷館の北2kmに平沢寺がある。平沢寺からは江戸時代に秩父重綱(重忠の曾祖父)と考えられる人物の名と「久安四年(1148)」の年号が刻まれた経筒(教典を収めたもの)が出土した。鎌倉時代の平沢寺は、東日本最大の方三間阿弥陀堂や池・大石をもつ「浄土庭園」が配された七塔伽藍の大寺院であったことがわかっている。その景観は平等院鳳凰堂のようであったと推定される。出土経筒から見ると菅谷館を含めたこの一帯は早くから畠山氏の影響下にあったと考えられ、平沢寺は畠山一族に関係する大寺院であったことが推測される。
176	法雲寺跡(ホウウンジアト)	寺	富山・富山・大沢野	旧・細入村楡原の対岸、大沢野地区には重忠の子重保らが父の菩提を弔うために建立したと云われる法雲寺跡が残る。今は石碑が残るのみで、天文年間に楡原へ移転し、今の上行寺になったと伝えられる。法雲寺に祀られたという畠山重保像が今も地元の江戸家に残る。

177	棒ノ折山(ボウノオレヤマ)	山	埼玉・飯能・名栗	秩父の山岳地帯に多くの伝説を残す重忠は、鎌倉に上るのに奥武蔵の山越えの道を通っていたとも伝えられる。名栗村の棒ノ折山は重忠が通過する際、杖に使っていた棒が折れたことからその名が付いたと伝えられる。青梅へ抜ける間道ともいえるその尾根道からは武蔵御嶽神社もよく眺められる。別名棒ノ嶺ともいう。
178	法養寺(ホウヨウジ)	寺	埼玉・本庄・児玉	建保元年に重慶が彫刻した御本尊と伝わる。白雉山法養寺
179	星の谷(ホシノタニ)	伝承	神奈川・座間・一	重忠の娘、護王姫が夫義経の後を慕い座間入谷の星の谷まで来て難産で死んだ。後に日蓮が護王姫を弔い、一字の堂を立て手厚く祀ったという。「圓教寺縁起」
180	仏先観音(ホトケサキカンノン)	伝承	長崎・有明・一	文治4年(1188)、景清は畠山重忠に追われて仏崎に逃げ込んだ。夕闇の中追いついた重忠は刀を抜いて斬りつけたところ手応えはあったが景清は逃げ切った。重忠が調べてみると観音様が岩に彫られていて刀の傷がつき血痕が点々とその辺に残っていた。観音様が身代わりとなったと伝わる
181	本田城(ホンダジョウ)	城館	埼玉・深谷・本田	本田近常の居城と伝わる。本田堀ノ内と上本田に城館跡がそれぞれ残る。
182	万騎ヶ原古戦場 (マキガハラコセンジョウ)	戦場	神奈川・横浜・旭	重忠を討つため、北条勢がここに数万騎の陣を構えたことから呼ばれるようになったという。明治25年に建立された畠山重忠公遺烈碑がある。
183	松ノ木峠(マツノキトウゲ)	峠	東京・青梅・成木	鎌倉古道の一つで、かつて重忠が腰掛けた岩があったという。
184	松原湖(マツバラコ)	伝承	長野・小海・一	頼朝が病にかかった時、重忠が頼朝の命により、龍の生肝を得るため松原湖へ赴いた。そこで出会った重忠の母が入水し龍に化身して、この龍からとった肝で頼朝は治癒したと伝わる。
185	眞鳥日向守城址 (マトリヒナタノカミジョウセキ)	城館	埼玉・さいたま・西堀	西堀の高台に残る重忠の家臣眞鳥日向守の居城がある。
186	馬引沢峠(マヒキサワトウゲ)	峠	東京・青梅・柚木	青梅市梅郷から五日市方面へは馬引沢峠を越えるのも1つのルートと考えられている。重忠が馬を下りて徒歩で峠を越えたところから馬引沢の名が起ったと伝えられる。峠のふもとには古いおもむきを残す小道が今も残り、石川家の庭先には重忠が腰をかけたという腰掛石があったといい、「畠山重忠小休の里」と刻まれた石碑が建てられている。
187	満福寺(マンブクジ)	寺	埼玉・深谷・畠山	畠山館跡から北東500mに位置する。白田山観音院満福寺といい、新義真言宗豊山派の寺である。寺伝によると平安時代の開基で、重忠が寿永年間に再興し、自ら菩提寺としたと伝えられる。現在の建物は江戸期以降のものであるが、境内には板碑などが残される。
188	三島神社(ミシマジンジャ)	神社	東京・あきる野・戸倉	古来当社は源頼義、畠山重忠等武将の信仰厚く、太刀・槍等が奉納された。
189	武甲山御嶽神社(ブコウサンミタケジンジャ)	神社	埼玉・横瀬・一	重忠が太刀を奉納したと伝える。
190	御嶽村の柵跡(ミタケムラノサクアト)	城館	東京・青梅・尾本	柵跡は御嶽社の西南の字尾本にある、重忠が甲信越三国の警備として陣営をかまえたところという。
191	三峯神社(ミツミネジンジャ)	神社	埼玉・秩父・大滝	三峯神社は、日本武尊の東国遠征に由来する由緒ある標高1100mにある山岳神社で、重忠が加護していたと伝えられる。1182年「秩父庄司畠山重忠当社に加護を祈願する」、1195年「畠山重忠当社十里四方の土地を寄進し、守護不入の地となす」と重忠の山岳地域との縁と信仰に篤い姿を表す事項と考えられます。養和2年の重忠の願文と伝える文書と奉納の長刀一振「銘天国」がある。
192	宮野氏(ミヤノシ)	伝承	東京・目黒・碑文谷	旧家百姓友右衛門は宮野氏で、重忠の家人であったという。
193	棕神社(ムクジンジャ)	神社	埼玉・秩父・下吉田	畠山氏ゆかりの重要な史跡として、旧吉田町の棕神社があげられる。秩父氏館跡の対岸に位置し、秩父氏代々の氏神様といわれ、元々の秩父氏の本拠地ということが出来る。今では竜勢で有名な神社であるが、奈良時代から続く由緒ある式内社である。畠山重忠が秩父から深谷市畠山に移ったとき、この棕神社を勧請して畠山に井棕神社を祀ったと伝えられる。
194	武蔵御嶽神社 (ムサシミタケジンジャ)	神社	東京・青梅・御岳	秩父から奥多摩にかけての山々には、重忠に関する数々の足跡が残されている。代表的なのは東京都青梅市に所在する武蔵御嶽神社である。標高930mの御嶽山山頂にある武蔵御嶽神社には、重忠が奉納したと伝えられる赤糸威大鎧や太刀が残り、境内にはアルミ製の重忠の騎馬像がある。晴天の日には、ここから武蔵国から鎌倉までの道々が一望できる絶景の場所である。
195	六ツ塚(ムツヅカ)	墓	神奈川・横浜・旭	二俣川の古戦場から緩やかに坂を上っていくと南向きの閑静な住宅街の中に六ツ塚が残されている。「六ツ塚」は、重忠の最後に従ったという一族郎党134騎を埋葬したと伝えられる墓所で、重忠の霊堂である薬王寺境内に径2mほどの六つの塚が現在でも保存されている。

196	薬王院(ヤクオウイン)	寺	神奈川・横浜・旭	内に六つ塚を有する。毎年、重忠の命日 6 月 22 日に地元旭区民の手により盛大な慰霊祭が行われる。
197	屋島(ヤシマ)	戦場	香川・高松・一	那須与一で有名な扇の的当ては最初弓矢の腕を買われ重忠が指名されたが、体調が優れないため那須与一にその役を譲ったと伝わる。
198	矢畑・越し巻き (ヤバタケ・コシマキ)	伝承	神奈川・横浜・旭	重忠が北条方に取り囲まれ、あたり一面、矢の畑のようになったことから呼ばれている。またその矢が腰巻のようにぐるり取り巻いたので「越し巻き」と呼ばれている。
199	由比ヶ浜(ユイガハマ)	戦場	神奈川・鎌倉・一	元久 2 年 6 月 22 日、早朝に北条方に囲まれた重保が討たれた場所である。
200	永福寺(ヨウフクジ)	寺	神奈川・鎌倉・二階堂	鶴岡八幡宮東側の谷奥にある永福寺跡は、源頼朝が陸奥国平泉の大長寿院を見本として建立した大寺院で、建久 3 年(1192)に着工した。これまでの発掘調査で、全長 130m に及ぶ壮大な伽藍跡が発見され、前面に長さ 100m 以上ある池が造られていることがわかった。この永福寺造営に際して、重忠が大活躍した。材木運びでは数十人分の働きをしたことや池の置き石を一人で担ぎ上げた事など、重忠の大力を示す出来事として伝えられている。発掘調査では重忠が担ぎ上げたかもしれない巨石が発見された。
201	鎧の渡し(ヨロイノワタシ)	伝承	神奈川・横浜・旭	首洗いの井戸があるあたりは帷子川の川幅が広く、渡る時に鎧を頭の上に乘せたといわれている。別名鎧ヶ淵。
202	竜蔵寺(リュウゾウジ)	寺	栃木・日光・御幸町	寺伝によれば、建保元年に重慶が営んだ草庵に始まるという。
203	龍雲寺(リュウウンジ)	寺	新潟・新潟・中央区	畠山重忠開基と伝わる。
204	六条若宮(ロクジョウワカミヤ)	神社	京都・京都・東山	建久元年(1190)11 月 11 日、建久 6 年(1195)3 月 9 日に重忠が頼朝に随行する。
205	六郎重保の営址 (ロクロウシゲヤスノエイシ)	伝承	静岡・伊豆・函南	「田方郡志」によれば函南町畑毛に六郎重保の営址ありという。
206	六郎重保墓 (ロクロウシゲヤスボ)	墓	神奈川・横浜・金沢	対岸の六郎谷には嫡男六郎重保墓と伝えられる五輪塔が残り、禅林寺で毎年供養を行う。
207	若宮八幡社 (ワカミヤハチマンジンジャ)	神社	埼玉・秩父・下吉田	重忠が治承4年に鶴窪八幡宮を祀ったのが始まりとされる。以前は秩父氏館にあったものを現在棕神社境内に移築した。

重忠ゆかりの品

No.	種別	名称/読み仮名	県名	市町村名	遺存場所	詳細
1	鎧	赤糸威大鎧 (アカイトオドシオオヨロイ)	東京	青梅	武蔵御嶽神社	畠山重忠が奉納したと伝わる赤糸威大鎧が現存する。鎌倉時代初期の代表的な大鎧で日本三大鎧に数えられ、国宝に指定される。重忠にちなむ遺品で現存するものは非常に少なく、大変貴重な資料である。神社右手に所在する宝物殿で一般に公開されている。
2	鎧	鎧(アブミ)	岩手	田野畑	畠山神社	畠山神社に保存される。
3	鎧	鎧(アブミ)	神奈川	横浜市 金谷	東光禅寺	東光禅寺に馬具一式が保存される。
4	鎧	鎧(アブミ)	富山	富山、 楡原	上行寺	上行寺に五三ノ桐の家紋が残る鎧一式が残る。
5	梵鐘	円乗院梵鐘(エンジョウイン ボンショウ)	埼玉	さいたま	円乗院	畠山重忠が道場村に築いた寺院をここに移した経緯が銘として記される。
6	石	重忠力石 (シゲタダチカライシ)	埼玉	深谷	畠山館	重忠が鍛錬のために投げたと伝わる大石。
7	板碑	重忠銘板碑 (シゲタダメイイタビ)	埼玉	都幾川	慈光寺	弘長二年三月(1262)に慈光寺山内に造立された弥陀一尊種子板碑に、重忠・秩父六良と追刻されている。重忠、六郎重保親子を供養したものといわれる。緑泥片岩製のこの板碑は、高さ2.7m、幅0.7mを測り、破損して宝物殿の軒下に保存されていたが、近年補修されて心経堂脇に復元された。
8	位牌	重忠位牌(シゲタダイハイ)	埼玉	深谷市、 畠山	満福寺	戒名「實山宗真大居士霊位・元久2年乙丑歳8月18日」。
9	位牌	重忠位牌(シゲタダイハイ)	神奈川	横浜市 金谷	東光禅寺	戒名「東光寺殿前秩父太守月峰慈明大禪定門」(元久2年3月18日)。
10	位牌	重忠位牌(シゲタダイハイ)	埼玉	東松山	長慶寺	戒名「元徳院殿重忠範崇大居士」(建久2年6月22日)。
11	位牌	重忠位牌(シゲタダイハイ)	埼玉	長瀨	総持寺	戒名「重忠院龍岳雲公居士」。
12	位牌	重忠位牌(シゲタダイハイ)	東京	青梅	即清寺	戒名「勇讃即清大禪定門」。
13	位牌	重忠位牌(シゲタダイハイ)	東京	あきる野	慈勝寺	戒名、表面「開基圓壽院殿善通理體大禪定尼」裏面「建久5年7月18日」。
14	位牌	重忠位牌(シゲタダイハイ)	富山	富山、 細入	上行寺	戒名「大心院殿蓮空神祇」(元久2年6月22日卒)。
15	文書	重忠の願文 (シゲタダノガンモン)	埼玉	秩父	三峯神社	三峯神社に残る養和2年の文書。
16	位牌	重慶位牌(シゲヨシイハイ)	埼玉	小川	上古寺	土峯山の伝畠山重忠墓を守ってきた小久保家に伝わる重忠の三男重慶の位牌に没年文永元年(1264)と記される。
17	仏像	地藏菩薩(ジゾウボサツ)	神奈川	葉山	長徳寺	本尊の御地藏は高さ5尺で、畠山重忠の守護仏と伝わる。現在、長徳寺は廃寺となり、地藏は近くの仙光院に移されている。
18	梵鐘	常福院梵鐘(ジョウフクイン ボンショウ)	東京	青梅	常福院	重忠が建久年間にこの寺を再興したと記した梵鐘が残る。
19	経筒	秩父重綱銘経筒(チチブシゲ ツナメイキョウツツ)	埼玉	嵐山	平沢寺	江戸時代に発見された秩父重綱(重忠の曾祖父)と考えられる人物の名と「久安四年(1148)」の年号が刻まれた経筒(経典を収めたもの)が出土した。(県指定文化財)
20	茶釜	茶釜(チャガマ)	埼玉	深谷	満福寺	重忠ゆかりの品と伝えられる。
21	狛犬	鉄製狛犬 (テツセイコマイヌ)	宮崎	高千穂	高千穂神社	源頼朝が寄進したと伝えられる「鉄製狛犬」が残る。鉄製の狛犬は大変珍しく、国の重要文化財に指定されている。本殿の左右に「阿吽」の形で室内に鎮座する。大人二人で持ち運ぶのがやっとの重さで、頼朝の代参でここまで旅してきた畠山重忠の怪力振りを示すものかも知れない。
22	仏像	銅造阿弥陀如来座像 (ドウゾウアマミダニョライザ ゾウ)	埼玉	小川	上古寺	畠山氏が残したと言われる銅造阿弥陀如来座像が代々伝わる。

23	仏像	如意輪観音 (ニョイリンカンノン)	埼玉	さいたま	如意輪寺 観音堂	畠山重忠の守護仏と伝えられる。
24	画像	畠山重忠画像 (ハタケヤマシゲタダガゾウ)	千葉	長柄		重忠は源頼朝に仕え、豪勇と誠忠によって知られたが元久二年(1205)、北条氏の謀略によって殺されたが、その妻は岩松氏に再嫁した。その子泰国は畠山三郎と名乗り上総介となった。この画像は近世初期、重忠が歌舞伎・浄瑠璃などで、智勇兼備の武将として賞賛せられたころの製作と推察される。(長柄町文化財)
25	像	畠山重保像 (ハタケヤマシゲヤスゾウ)	富山	富山市、 楡原	法雲寺跡	重忠の四男重保の像と伝わる。大沢野町江戸家所蔵。
26	文書	文治四年文書 (ブンジヨネンモンジョ)	宮崎	高千穂	高千穂 神社	「文治四年壬四月(1188)天下より御名代ちちふ様(重忠)十社大明神(高千穂神社)に参詣」と記されている。
27	刀	宝寿丸(ホウジュマル)	東京	青梅	武蔵御嶽 神社	重忠が奉納したといわれ、御嶽神社に伝わる、大小対をなしているが大が1.18m、小が0.72mで、奥州平泉の刀匠宝寿の銘があるので宝寿丸とよばれる。また、南部餅鉄を用いているという。(重要文化財)
28	文書	源頼朝袖判平盛時奉書 (ミナモトヨリトモソデハン タイラモリトキホウショ)	東京			阿津賀志山の合戦が終わったあと、頼朝が重忠にあてて、軍勢が乱暴な行いをしないよう監督することを命じた文書。原資料は東京大学史料編纂所。
29	仏像	木造十一面観音菩薩立像 (モクゾウジュウイチメンカン ノンボサツゾウ)	埼玉	ときがわ 川	慈光寺	観音堂に祀られる重忠念持仏と伝わる木造十一面観音菩薩立像は町指定文化財。像高八尺余で重忠公の身長と同じ180cmといわれる。

重忠に関係する人物

No.	氏名/読み仮名	主に活躍した地名	説 明
1	愛甲季隆(アイコウスエタカ)	神奈川	二俣川の合戦で重忠公を討ち取ったといわれる人。相模伊勢原の武者で、弓の名人であったといわれている。
2	夙妻太夫(アサヅマデュウ)	東京	国分寺界隈の遊女。重忠と恋仲になり、重忠戦死とだまされ、重忠を思いつつ自害をした。
3	足立遠元(アダチトオモト)	東京	重忠の妻の父で、武蔵国足立郡付近が本貫地。
4	天野則景(アマノノリカゲ)		源頼朝の御家人、奥州征討時に由利維平を生け獲りにしたと訴えた。
5	池禅尼(イケノゼンニ)	京都	生没年不詳。平清盛の義母。平治の乱後、池禅尼の助命嘆願により源頼朝は命を助けられ伊豆にながされた。平頼盛の母。
6	一幡(イチマン)	神奈川	源頼家の子。比企の乱で討たれる。
7	伊東祐親(イトウスケチカ)	静岡	伊豆の豪族。頼朝に敵対。曾我兄弟は孫。
8	稲毛重成(イナゲシゲナリ)	東京	秩父氏一族で妻は北条時政の娘。畠山重忠とはいとこにあたる。重忠の討伐に関わったが、二俣川の合戦後、北条氏に討たれる。
9	今井兼平(イマイカネヒラ)	長野	(?~1184) 木曾義仲の重臣。中原兼遠の四男で義仲の乳母子。
10	岩松義純(イワマツヨシズミ)	栃木	足利一族。重忠没後に北条氏出身の重忠の妻を迎え、室町幕府の管領畠山家の祖となった。
11	宇佐美実政(ウサミサネマサ)	静岡	源頼朝の御家人。由利維平を捕らえた。
12	氏王丸(ウジオウマル)	埼玉	畠山重忠の幼名。
13	江戸重長(エドシゲナガ)	東京	秩父一族。重忠の祖父重弘のとき分かれる。武蔵国総検行職を勤む。
14	大串重親(オオクシシゲチカ)	埼玉	武蔵七党の一つ横山党に属する大串次郎孝保の子。重親が元服の式を挙げた時、重忠が仮親となって烏帽子をかぶせた。重忠にとっては烏帽子子。
15	多好方(オオノヨシカタ)	京都	神楽の名手で重忠が梶原景季とともに、建久2年11月19日に神楽を習う。
16	大庭景親(オオバカゲチカ)	神奈川	(?~1180) 平家方の大将で石橋山の戦いで勝利したが、後に頼朝に討たれる。
17	大姫(オオヒメ)	神奈川	源頼朝の長女。病治癒祈願のため頼朝・重忠が日向山薬師に参拝する。
18	岡部忠澄(オカベタダスミ)	埼玉	(?~1197) 岡部六弥太。重忠の妹を妻とし、一ノ谷の合戦では平忠度を討ち取る。
19	乙姫(オトヒメ)	神奈川	源頼朝の次女。京都から乙姫を治療に来た医師を重忠館に泊めた。正治元年6月、14歳で逝去。
20	小山田有重(オヤマダアリシゲ)	東京	畠山重能の弟。小山田別当と称し、武蔵の国南多摩郡小山田庄を本拠地とした。現在の東京都町田市下小山田町にある大泉寺の境内に有重の館跡という。
21	梶原景季(カジワラカゲスエ)	神奈川	(1162~1180) 頼朝から名馬磨墨を賜った。
22	梶原景時(カジワラカゲトキ)	神奈川	(?~1200) はじめ石橋山の戦いで大庭景親とともに、源頼朝を攻めたが、後に頼朝に従い功績をあげた。弁舌巧みで、人を陥れ、多くの人を失脚させた。義経もその中のひとり。頼朝の死後排斥され一族討死をした。
23	勝木則宗(カツキノリムネ)	神奈川	梶原景時の家人。重忠が生け捕りした。
24	河越重頼(カワゴエシゲヨリ)	埼玉	秩父一族。重忠の祖父重弘のとき分かれる。武蔵国総検行職を勤む。
25	桓武天皇(カンムテンノウ)	京都	(737~806) 平安遷都をした天皇で、桓武平氏の祖となる。
26	菊の前(キクノマエ)	神奈川	重忠の内室と伝えられ、二俣川古戦場に駆けつけ、重忠の戦死を悲しみそのまま自害したといわれる。墓所は籠のまま埋葬されたため「駕籠塚」といわれる。
27	木曾義仲(キソヨシナカ)	長野	(1154~84) 父は源義賢、母は小枝御前。父が武蔵の国の大蔵館で源義平に討たれたため、幼い義仲は畠山重能と斉藤実盛に助けられ、木曾の中原兼遠のもとで成人した。源義仲、また旭将軍とも別称される。平家を倒すために活躍するが、都で乱暴したので頼朝に討たれた。
28	清原武衡(キヨハラタケヒラ)	岩手	(?~1087) 後三年の役で源義家、秩父武綱らに討たれた。
29	公暁(クギョウ)	神奈川	(1200~19) 将軍頼家の次男。17歳で鶴岡八幡宮の別当となる。父の頼家が殺されたのは、叔父の実朝と北条義時との共謀に違いないと思ひこみ実朝を討ったが、公暁はその日のうちに義時の命をうけた三浦義村に斬られた。
30	工藤祐経(クドウスケツネ)	静岡	(?~1193) 北条時政近郷の出身で長く京に住み当時の文化人。頼朝に重く用いられ権勢をふるったが、1193年頼朝の富士野の巻狩りの夜、親の仇討ちという曾我兄弟によって討たれた。
31	熊谷直家(クマガイナオイエ)	埼玉	熊谷次郎直実の子。
32	熊谷直実(クマガイナオザネ)	埼玉	(?~1208) 一ノ谷の合戦で平敦盛を討ちとった話は有名。その後出家し、法然門下となり蓮生と名乗る。
33	後白河法皇(ゴシラカワホウオウ)	京都	(1127~92) 第77代の天皇。在位3年、以後30年余り院政を行う。院政とは昔、上皇や法皇が御所で政治をとったこと。
34	児玉党(コダマトウ)	埼玉	平安末期から中世にかけて武蔵国に存在した武蔵七党の一党。
35	駒王丸(コマオウマル)	埼玉	木曾義仲の幼名。
36	金剛別当秀綱(コンゴウベツトウヒデツナ)	宮城	奥州藤原氏の阿津賀志山城守将。
37	斉藤実盛(サイトウサネモリ)	埼玉	(?~1183) 重能とともに駒王丸を預かった人。篠原の戦いで討ち死にした。
38	佐々木高綱(ササキタカツナ)		(?~1214) 宇治川の合戦で先陣となる。高綱の愛馬生嗟のいななきを遠くで聞いた重忠が聞き分けたことで知られる。
39	静御前(シズカゴゼン)	京都	源義経に愛された都の白拍子。舞をする遊女で敵になった源頼朝の前で義経を思う歌をうたい、おどった。静は京に帰って19歳でなくなったという。

40	篠塚伊賀守重広 (シノヅカイガノカミシゲヒロ)	群馬	重忠の子孫。新田義貞四天王と呼ばれた武将。
41	島津忠久(シマヅタダヒサ)	鹿児島	(1179～1227) 丹後の局の子と伝わる、薩摩に下向し、島津家の祖となる
42	下河辺行平 (シモコウベユキヒラ)	埼玉	古代、蝦夷の守りとして陸奥におかれた官庁であった鎮守府の将軍を代々つとめた家の子。畠山重忠も鎮守府将軍、平良文の子孫である。
43	真円(シンエン)	京都	永福寺薬師堂供養の導師として京都から建久4年11月27日に招かれた、重忠が陪膳を勤めた。
44	真正(シンショウ)	三重	別当真正。重忠が地頭に命じられた伊勢国沼田御厨の代官。不正を働いた。
45	曾我祐成(ソガスケナリ)	静岡	(1172～93) 建久4年5月富士の狩場で弟時致とともに親の敵工藤祐経を討った曾我物語で有名。仇討ち後、現場で討たれる。曾我時致の兄。
46	曾我時致(ソガトキムネ)	静岡	曾我祐成の弟。仇討ち後、重忠が尋問したという。
47	尊南坊僧都定任 (ソナンボウソウズテイニン)	和歌山	熊野の僧で文治4年9月14日、鎌倉に招かれた。
48	平敦盛(タイラアツモリ)	京都	(1169～84) 熊谷次郎直実に討たれた。
49	平景清(タイラカゲキヨ)	京都	(?～1196) 平家の侍大将。悪七兵衛と呼ばれる。景清の勇猛は後世文学・演劇上で取り上げられ、重忠と絡む「阿古屋」は有名。
50	平清盛(タイラキヨモリ)	京都	(1118～81) 太政大臣。平治の乱後、太政大臣となり平氏政権を樹立した。
51	平維盛(タイラコレモリ)	京都	(1158～84) 平重盛の嫡男。富士川合戦の大将軍。一ノ谷の合戦後、屋島を抜け出して高野山で出家した。
52	平師盛(タイラモロモリ)	京都	平重盛の末子。一ノ谷の合戦で本田近常に討たれた。(平家物語)
53	平重盛(タイラシゲモリ)	京都	(1138～79) 平清盛の長男。温厚で人望も厚かったが病死した。
54	平宗盛(タイラムネモリ)	京都	(1147～85) 平清盛の三男。平氏の総大将。壇の浦の戦いで死におくれ源氏の手にとられ、近江の国の篠原で切られた。
55	平頼盛(タイラヨリモリ)	京都	(1131～86) 清盛の異母弟で母が池禅尼。平家滅亡後も源氏の保護を受け、1184年に鎌倉での餞別の儀に重忠が列席した。
56	高望王(タカモチオウ)	東京	桓武天皇の孫で桓武平氏の祖。関東に土着して関東平氏の基礎を築いた。
57	竹御所(タケノゴシヨ)	神奈川	源頼家の子。
58	丹後局(タンゴノツボネ)	神奈川	比企能員の妹。頼朝の妾で北条政子の嫉妬により鎌倉を追われ、大阪の住吉で一子をもうける。後の島津忠久という説もある。
59	丹党(タントウ)	埼玉	平安末期から中世にかけて武蔵国に存在した武蔵七党の一党。
60	丹波時長(タンバトキナガ)	京都	京都の医師。乙姫治療のため鎌倉に滞在時に重忠の南御門邸に滞在。
61	秩父重綱(チチブシゲツナ)	埼玉	重忠三代の祖。平沢寺出土の経筒に銘が残る。
62	秩父重弘(チチブシゲヒロ)	埼玉	重忠二代の祖。秩父に住み武蔵国総検行職をつとめた人。
63	秩父武綱(チチブタケツナ)	埼玉	重忠四代の祖。源義家に従い後三年の役に従った。
64	千葉胤正(チバタネマサ)	千葉	下総国の豪族、坂東八平氏の一つ。胤正の母は秩父重弘の娘であり、重忠の従兄弟である。
65	土肥実平(ドイサネヒラ)	神奈川	鎌倉幕府初期の有力御家人。
66	巴御前(トモエゴゼン)	長野	中原兼遠の娘で木曾義仲の愛妾。武勇に優れ男をしのぐ女武者であったと言われる。義仲亡き後、出家したと伝えられる。
67	那須与一(ナスヨイチ)	栃木	生没年不詳。那須太郎資高の子で与一宗高。屋島の合戦で海上に浮かぶ小舟の扇を撃ち抜いたことで有名。
68	長居(ナガイ)	神奈川	関東8カ国でも有名な大力の相撲とり。重忠と相撲をとり首の骨を折られた。
69	長瀬重綱(ナガセシゲツナ)	長野	義仲の家臣。宇治川の合戦で重忠に討たれる。
70	長沼宗政(ナガヌマムネマサ)	栃木	畠山重慶を誅した武将。
71	長野重清(ナガノシゲキヨ)	長野	重忠の弟。二俣川合戦時に信濃にいた。
72	中原兼遠(ナカハラカネトウ)	長野	(?～1181) 義仲を預かり成人させた武将。
73	西木戸國衡(ニシキドクニヒラ)	岩手	奥州藤原氏の武将で藤原泰衡の弟。阿津賀志山の城将で和田義盛の矢にあたり、その後、大串次郎に討たれた。
74	日光別当弁覚(ニッコウベツトウベンガク)	栃木	建保元年9月19日、重慶が日光山麓にこもり謀反を企てていると幕府に訴えた。
75	畠山重忠(ハタケヤマシゲタダ)	埼玉	(1165～1205) 本人
76	畠山重忠室1 (ハタケヤマシゲタダシツ1)	埼玉	足立遠元の娘。重秀の母。
77	畠山重忠室2 (ハタケヤマシゲタダシツ2)	埼玉	北条時政の娘。重保の母。後に岩松義純に嫁ぎ畠山泰国を生む。
78	畠山重秀(ハタケヤマシゲヒデ)	埼玉	重忠の六男。重忠とともに二俣川で討たれる。
79	畠山重宗(ハタケヤマシゲムネ)	宮城	重忠の弟。葛岡郡を領する。二俣川合戦時に奥州にいた。
80	畠山重保(ハタケヤマシゲヤス)	埼玉	重忠の四男。母は北条政子の妹。元久2年由比ガ浜で討たれる。
81	畠山重慶(ハタケヤマシゲヨシ)	埼玉	重忠の三男。日光で反乱を起こし討たれたとも、岩手に渡り浄法寺氏の祖になったとも、小川の古寺から慈光寺に入山したともいわれる。
82	畠山重能(ハタケヤマシゲヨシ)	埼玉	重忠の父。秩父から畠山に進出した。京都大番役で平氏に仕えていた。
83	畠中重成(ハタケナカシゲナリ)	京都	重忠と宗姫の間に生まれたと伝わる。山代畠中氏の祖。
84	榛澤成清(ハンザワナリキヨ)	埼玉	重忠の郎党。重忠の乳母子で、二俣川で討死した。榛澤氏は、武蔵七党のひとつ丹党に属している。子供のころから重忠と行動をともにし、平家討伐、奥州征討でも重忠とともに活躍した。二俣川合戦のとき北条方の大軍勢を見て、一度引き返し態勢を立て直すことを重忠に勧めたのは成清であった。また、重忠が洪水の荒川を鶯に導かれて渡ったのは、成清の館に行った後のことといわれる。深谷市の後榛澤には、成清の供養塔が江戸時代に立てられ、地元で厚く信仰されている。

85	比企能員(ヒキヨシカズ)	埼玉	(?~1203) 比企郡の豪族。源頼朝の乳母であった比企禪尼の養子、娘の若狭局が將軍の頼家の妻になったので、源氏の外戚として権威をふるい北条氏と争うようになり、逆に北条時政に討たれた。
86	平賀朝雅(ヒラガトモマサ)	長野	(?~1205) 平賀義信の子。母は比企禪尼の三女で北条時政の後妻である牧の方の娘婿。畠山重保との不和がもとで、北条時政が畠山氏を討つことにした。將軍になろうと企て、最後は北条義時に討たれる。
87	藤原秀衡(フジワラヒデヒラ)	岩手	(?~1187) 東北地方の支配者となって奥州藤原氏の地位を確立した人。源義経をかくまうなど、源頼朝に対抗する立場をとった。
88	藤原泰衡(フジワラヤスヒラ)	岩手	(1155~89) 岩手県の平泉町を根拠として奥州藤原氏の四代目。義経を衣川館に攻め滅ぼしたが後に頼朝に攻められ藤原氏は滅びる。
89	北条時房(ホウジョウトキフサ)	神奈川	(1175~1240) 北条時政の三男。義時の弟。重忠元服の儀に列席。
90	北条時政(ホウジョウトキマサ)	神奈川	(1138~1215) 源頼朝の妻、北条政子の父。頼朝が亡くなると、次第に権力をにぎり北条氏が栄えるもとをきずいた。鎌倉幕府初代執権。
91	北条政子(ホウジョウマサコ)	神奈川	(1157~1225) 源頼朝の妻。北条時政の娘。尼將軍と呼ばれる。
92	北条政範(ホウジョウマサノリ)	神奈川	北条時政の後妻である牧の方の末の子。
93	北条義時(ホウジョウヨシトキ)	神奈川	(1163~1224) 鎌倉幕府二代執権。北条時政の前妻の次男。兄の宗時が戦死のため嫡子の地位を得た。以後平家追討、奥羽藤原氏討伐に手柄をたてた。なお父時政を追放した牧の方を討ち、北条氏の支配的位置を確立した。
94	坊門信清(ボウモンノブキヨ)	京都	京都の貴族。北条時政の後妻、牧の方の縁続き。娘は実朝の妻になる。
95	本田近常(ホンダチカツネ)	埼玉	重忠の重臣で、幼名を鬼石丸二郎と言う。本田氏の先祖は、畠山氏と同じ村岡良文である。近常は二俣川で討死した。近常の養子の本田貞親は重忠の末子重季と伝えられ、薩摩へ島津忠久とともに移るとの説がある。
96	真壁經内(マカベキナイ)	茨城	勝木則宗を生け捕った功を畠山重忠のものと偽って主張した。
97	牧の方(マキノカタ)	神奈川	生没年不詳。北条時政の後妻で、のちに娘婿の平賀朝雅を將軍にしようとしたところ、北条義時に 1205 年に討たれた。
98	真鶴姫(マナツルヒメ)	埼玉	三浦大介義明の娘。重忠の母と伝えられる。
99	三浦義明(ミウラヨシアキ)	神奈川	相模の豪族。重忠の衣笠城攻めで自害する。
100	三浦義澄(ミウラヨシズミ)	神奈川	(1127~1200) 三浦大介義明の子(重忠の叔父)。幕府創業以来の重臣。
101	三浦義村(ミウラヨシムラ)	神奈川	(?~1239) 三浦義澄の子。
102	源実朝(ミナモトサネトモ)	神奈川	(1192~1219) 父は頼朝、母は北条政子。兄頼家の死後、12 歳で將軍職につく。政治の実権をもたなかったので和歌に心を傾ける。鎌倉の鶴岡八幡宮参詣の帰り、兄頼家の子、公暁によって殺された。時に 18 歳。歌集に金槐和歌集がある。
103	源範頼(ミナモトノリヨリ)	埼玉	(?~1193) 源義経の兄。建久 4 年(1192) に兄の頼朝に討たれた。
104	源義家(ミナモトヨシイエ)	神奈川	(1039~1106) 東国源氏の祖で、武勇の神といわれた。別名八幡太郎義家という。
105	源義賢(ミナモトヨシカタ)	埼玉	頼朝の叔父。源義平に殺された。大蔵館に墓がある。
106	源義経(ミナモトヨシツネ)	京都	(1159~1189) 頼朝の弟。源平の戦いで大活躍し、平家を滅ぼした武将。兄の頼朝は大きな手柄をたてた義経の功績を認めず殺そうとした。のがれて藤原秀衡のもとへ身を寄せたが、秀衡の息子の泰衡におそわれ自害した。
107	源義仲(ミナモトヨシナカ)	長野	→木曾義仲
108	源義平(ミナモトヨシヒラ)	埼玉	(1141~1160) 頼朝の兄。平治の乱で活躍。
109	源頼家(ミナモトヨリイエ)	神奈川	(1182~1204) 源頼朝の長男。母は北条政子で、若狭局を妻とする。二代將軍となり、北条時政と争ったが 23 歳で修禅寺で暗殺された。
110	源頼朝(ミナモトヨリトモ)	神奈川	(1147~1199) 伊豆で 20 年間人質生活を送った後、源平の戦いで平家を滅ぼし全国を支配、征夷大將軍に任命され鎌倉幕府を開いた。
111	源頼政(ミナモトヨリマサ)	京都	(1104~1180) 治承 4 年(1180)、以仁王を奉じ平家打倒の挙兵したが、宇治で敗死。
112	明恵上人(ミョウエショウニン)	京都	華嚴宗の高僧。重忠が明恵上人を訪れたときもうもうと土煙が立ち上り「勇士というのにふさわしい人物がやってくるので、その氣配があのように見えるのだ」といった。一説には浄土宗の法然との説もある。
113	宗姫(ムネヒメ)	京都	平宗盛の娘。重忠と京都で知り合い畠中重成を生むと伝わる。
114	以仁王(モチヒトオウ)	京都	(1151~80) 後白河法皇の第二皇子。治承 4 年(1180)、平家討伐の令旨発したが、宇治で敗死。
115	山本兼隆(ヤマキカネタカ)	静岡	伊豆の代官。頼朝挙兵時に討たれた。
116	結城朝光(ユウキトモミツ)	茨城	(1168~1254) 梶原景時を弾劾した中心人物。
117	由利維平(ユリコレヒラ)	秋田	奥州藤原氏の家臣。重忠の丁寧な尋問に感心し、後に幕府の御家人となる。
118	吉見頼綱(ヨシミヨリツナ)	埼玉	武蔵国吉見郡を本領とする。重忠が没収された伊勢の所領を与えられた。
119	若狭局(ワカサノツボネ)	神奈川	比企能員の娘。源頼家の妻で、比企の乱で討たれる。
120	和田義盛(ワダヨシモリ)	神奈川	(1147~1213) 三浦一族。鎌倉幕府の侍所別当に任じられた。

関係用語集

No.	種別	名称/読み仮名	詳 細
1	本	吾妻鏡(アズマカガミ)	鎌倉幕府が編纂した編年体の歴史書。治承4年(1180)4月に以仁王の令旨以降、文永3年(1266)3月の将軍宗尊親王の帰京までの記録である。鎌倉時代後期の成立と考えられる。
2	本	いしもち(イシモチ)	重忠の生涯を描いているという奈良絵本。
3	用語	烏帽子親(エボシオヤ)	元服した際に烏帽子をかぶせてもらう大人、後見人のことを烏帽子親と言い、被せてもらった者は烏帽子子(エボシゴ)という。
4	用語	大番役(オオバンヤク)	宮中や京の街を警護する役目で、平安時代後期から地方武士に割り当てられ、任期は三年。
5	本	御的日記(オマトニッキ)	鎌倉～室町期の射場始の日記集録で、応仁の乱の後に整理されたものと考えられる。
6	用語	鎌倉幕府(カマクラバクフ)	建久3年7月12日に源頼朝が開幕した。 ※成立年には諸説あり。
7	用語	眼代(ガンダイ)	中世の用語で代官・代理人のこと。主に武家で用いられた。
8	本	義経記(ギケイキ)	作者不詳。成立は室町初期から中期、軍記物で史実に伝説を混ぜた英雄伝説的色彩が強い。
19	本	吉記(キッキ)	権大納言・藤原(吉田)経房の日記。仁安元年(1166)～建久4年(1193)に書かれた。
10	用語	源氏(ゲンジ)	清和天皇を祖とする清和源氏が主流で、源頼朝は清和源氏を名乗る。
11	本	源平盛衰記(ゲンペイセイスイキ)	作者不詳。全44巻で、源平の争乱を題材とした軍記もので「平家物語」の異本の一種とされる。14世紀の南北朝内乱ころの成立と考えられている。
12	本	古今著聞集 (ココンチョモンジュウ)	説話集。橘成季の編で建長6年(1254)10月に成立。重忠と長居の相撲のエピソードが掲載される。
13	用語	御家人(ゴケニン)	鎌倉幕府の家臣。
14	用語	五輪塔(ゴリントウ)	供養塔や墓石、下部から方形の地輪、球形の水輪、三角形の火輪、半球状の風輪、団形の空輪を積み上げた塔形である。
15	用語	逆櫓の論議(サカロノロンギ)	屋島攻めのとき、後ろに下がる船の活用を主張する梶原景時を、逃げるための備えは不要と義経が退け、言い争いになった。重忠は冷静に景時を押さえ仲裁した。
16	用語	執権(シッケン)	幕府の中で将軍を補佐する役目。鎌倉幕府では北条氏が代々世襲した。
17	用語	地頭(ジトウ)	幕府の御家人が任命され、荘園の土地の管理や税の取り立てや警察などをつかさどる役目。
18	本	沙石集(シャセキシユウ)	仏教説話集で著者は無住一円(字は道暁)。弘安年間に完成したという。重忠が「鎮守府将軍たらんことを望み、館に煙を立てず」と書かれている。読みは「サセキシユウ」とも。
19	用語	荘園(ショウエン)	貴族や社寺が私有した土地のこと、地頭が任命される。
20	用語	庄司(ショウジ)	荘園の領主の命令を受けて荘園の雑務を処理する役目。
21	用語	白拍子(シラビョウシ)	平安時代末期から鎌倉時代にかけて流行った歌舞の一種。また、その踊りを生業とする人たち。
22	本	新編武蔵風土記稿 (シンベンムサシフドキコウ)	1828年成立の江戸幕府官撰の旧武蔵国を扱った地誌。編者は林述斎。沿革、山川、名所、産物、文芸などが収録される。
23	用語	征夷大將軍 (セイイタイショウグン)	武家の棟梁として朝廷から任命される。
24	本	曾我物語(ソガモノガタリ)	著者・成立年不詳。曾我兄弟が親の仇工藤祐経を討ち取った史実を中心に構成された英雄物語。
25	用語	朝廷(チョウテイ)	天皇が在所するところ。
26	本	帝王編年記(テイオウヘンネンキ)	神代から後伏見天皇に至るまでの編年体の歴史書で、僧永祐の撰と伝わる。
27	用語	銅拍子(ドウビョウシ)	楽器。真鍮製で、手をもって打ち鳴らす2枚の打楽器でシンバルのようなもの。静御前の舞にあわせて重忠が演奏した。
28	用語	鴨越の逆落とし (ヒヨドリゴエノサカオトシ)	一ノ谷の合戦で義経指揮のもと鴨越の急坂を奇襲した。そのとき重忠が愛馬を背負ったという。
29	本	平家物語(ヘイケモノガタリ)	信濃前司行長が元久2年から承久元年までの15年間に成立したといわれる。軍記物であり、琵琶法師により語り継がれてきた。
30	用語	平氏(ヘイシ)	桓武天皇を祖とする桓武平氏が主流で、畠山氏もその一派である。
31	用語	御厨(ミクリヤ)	神社の所領。
32	本	明月記(メイゲツキ)	藤原定家の日記。
33	用語	乳母(メノト)	主君の子などを養育する役。その子を乳母子(メノトゴ)と呼ぶ。
34	本	幼学綱要(ヨウガクコウヨウ)	明治政府が勅命により、年少者向けに1882年に編纂した倫理教育書。
35	用語	令旨(リョウジ)	皇太子・親王などの仰せを伝える文書。
36	用語	留守所惣検校職 (ルスドコロソウケンギョウシキ)	留守所は不在国司の代わりに国務を執行する官庁で、その代表が惣検校などと呼ばれた。武蔵の国では、平安時代から鎌倉時代にかけて、畠山氏・河越氏などの秩父一族が世襲した。

その後の重忠

No.	種別	名称/読み仮名	詳細
1	歌舞伎	阿古屋(アコヤ)	壇ノ浦兜軍記(だんのうらかぶとぐんき)の一節で全5段の『壇ノ浦…』の3段目が残り、琴・三味線・胡弓を使つての責め場から、俗称「阿古屋の琴責め」といわれている。作者は文耕堂・長谷川千四の合作で、初演は人形浄瑠璃が享保17年に大阪・竹本座、歌舞伎では寛政8年5月に江戸・桐座である。「平家が壇ノ浦に滅んだ後、悪七兵衛景清は仇を討とうと源頼朝をつけねらっていた。一方、源氏方も必死の平家残党の詮議を行っており、景清の行方を訊ねるため、愛人五条坂の遊女・阿古屋を捕らえて問注所に引き出す。詮議は冷酷な岩永左衛門と情け深い畠山重忠が執り行う。岩永は阿古屋を拷問にかけようとしますが、重忠は三曲(琴・三味線・胡弓)を持ち出し阿古屋に演奏をさせ、その音色に乱れがないのは真実行方を知らない証拠だと認めて釈放した。」歌右衛門が独自のものを作りあげた大役で坂東玉三郎が継承している。
2	錦絵	栗津原合戦男女巴御前(アワズカッセンユウジョトモエゴゼン)	栗津原合戦での重忠と巴御前が戦う姿をあらわしたもの。
3	絵馬	絵馬重忠力持石(エマシゲタダチカラモチイシ)	江戸東京たてもの園原資料蔵、永福寺庭石の大石を運ぶ重忠の姿を、歌舞伎の荒事風に描いている。
4	歌舞伎	大鹿歌舞伎(オオシカブキ)	長野県大鹿村の歌舞伎。演目に「畠山重忠館の段」がある。
5	浮世絵	木曾六十九駅大宮秩父山遠景畠山重忠(キノ69エキオオミヤチチブサンエンケイハタケヤマシゲタダ)	「芝居絵版画」三代豊国筆。
6	絵馬	重忠の大力(シゲタダノオオヂカラ)	宇治川合戦の大串次郎を投げ飛ばした絵が描かれる。天明9年(1789)1月奉納。庄和町富多神社所蔵。
7	歌	重忠節(シゲタダブシ)	元埼玉県知事畑和氏作詞、三橋美智也歌唱 「1 国は武蔵の畠山 武者と生まれて描く虹 剛勇かおる重忠に いざ鎌倉のときいたる 2 平家追い討つ一の谷 愛馬三日月背に負えば そのやさしさに馬も泣く ひよどり越えの逆落とし 3 雪の吉野の生き別れ 恋し義経いまいづこ 静の舞の哀れさに涙で打つや銅拍子 4 頼み難きは世の常か 誠一途が 謀反とは うらみも深く二侯に もののふの意地花と散る 5 仰ぐ秩父に星移り 菅谷館は苦むせど 坂東武者のかみぞと 面影照らす峯の月」
8	食品	重忠米(シゲタダマイ)	深谷市川本地区の重忠米部会が栽培するブランド米。減化学肥料、減化学農薬の特別栽培米。
9	食品	重忠みそ(シゲタダミソ)	「埼玉県ふるさと認証食品プレミアム」に認証されている。地元産の米と大豆で作られている。
10	ブランド	畠山重忠ブランド(ハタケヤマシゲタダブランド)	重忠の終焉の地・横浜市旭区では、重忠にちなんだ商品を「畠山重忠ブランド」として認定し、PRに努めている。「重忠最中」や「重忠の銅鑼(どら焼き)」などの商品がある。
11	錦絵	出世景清(シュセカゲキヨ)	「芝居絵版画」三代豊国筆。
12	浄瑠璃	出世景清(シュセカゲキヨ)	近松門左衛門が竹本義太夫のために貞享2年(1685)書き下ろした浄瑠璃である。重忠は神変不可思議すなわち、人知では推しはかれない不思議さを備えた超人的な人物として描かれている。
13	校歌	菅谷小学校(スガヤシヨウガッコウ)	嵐山町立菅谷小学校校歌二番「智あり仁あり勇さえありてあるが中なるもののふ彼と人に知られし英雄もかつてはここに住みたりき」。(嵐山町誌)
14	歌	夏野の露(ナツノツユ)	江戸時代末期、横浜市旭区清来寺の19代住職の曾我宥快が畠山重忠の武勇をたたえるため、近在の人々に呼びかけ「夏野の露」と呼ばれる巻物を作成し、現存する。
15	像	畠山重忠像(ハタケヤマシゲタダゾウ)	畠山館に昭和63年(1988)に建立された銅像。一ノ谷合戦の鶴越の勇姿を表したもので、堀口泰造氏による馬を担いだ姿である。
16	像	畠山重忠像(ハタケヤマシゲタダゾウ)	菅谷館に昭和2年(1927)に建立されたコンクリート像である。
17	像	畠山重忠像(ハタケヤマシゲタダゾウ)	武蔵御嶽神社に昭和56年(1981)、神社の式年大祭に建立されたアルミ製の騎馬像で、宝物殿の脇にある。北村西望氏作で、設置時にリフトで吊り上げた。
18	像	畠山重忠ロボット(ハタケヤマシゲタダロボット)	埼玉県立嵐山史跡の博物館に常設展示されている重忠の姿をしたロボット。重忠ロボット自らが、重忠の生涯を簡潔に紹介してくれる。
19	絵画	武将百人画像(ブショウヒャクニンガゾウ)	江戸期、歴史上の武将を描いた「武将百人画像」に、58番目に畠山重忠が描かれている。
20	祭	ねぶたの山車(ネブタノダシ)	青森のねぶたの山車に重忠力持ちがあった。
21	祭	だんじりの山車(ダンジリノダシ)	大阪岸和田のだんじりの山車に重忠のものがあった。
22	祭	まつりの山車(マツリノダシ)	愛知県清須市で6月初旬に行われる尾張西枇杷島まつりに登場する問屋町の山車「頼朝車(よりともしゃ)」には、源二位(源頼朝)、白拍子(静)、臣下(畠山重忠)が配されています。頼朝の前で、白拍子が舞い踊り、その舞に合わせて臣下(畠山重忠)が笛を吹く場面が再現されています。

畠山重忠関連文献

No.	発行年	作者	図書名	掲載紙	発行所
1	大正2年	八代国治・渡辺世佑	武蔵武士	有峰書店	
2	昭和2年	栗原勇	畠山重忠		
3	昭和3年	本畠村教育會	畠山重忠公		
4	昭和32年	下山つとむ	畠山重忠物語		埼玉県立文化会館
5	昭和37年	貫達人	畠山重忠	人物叢書	吉川弘文館
6	昭和52年	畠山重忠公史跡保存会編	畠山重忠		
7	昭和52年	畑やわら	畠山重忠		滴翠社
8	昭和59年	川本町教育委員会	畠山重忠墓		川本町教育委員会
9	昭和63年	栗原文蔵	金石文談義(四)	也加多第13号	
10	昭和63年	川本町教育委員会	畠山館跡		川本町教育委員会
11	平成元年	小久保忠克	鎌倉武士と川本	川本町史通史編	川本町
12	平成2年	福島正義	武蔵武士		さきたま出版会
13	平成2年	埼玉県教育委員会	秩父甲州往還	歴史の道調査報告書第11集	埼玉県教育委員会
14	平成2年	栗山欣也	重忠コーナーの展示資料	研究紀要第12号	埼玉県立歴史資料館
15	平成4年	栗山欣也	文治5年奥州合戦における畠山重忠	研究紀要第14号	埼玉県立歴史資料館
16	平成5年	小野文雄	埼玉県の地名	日本歴史地名大系第11巻	平凡社
17	平成5年	片山眞佐子	畠山庄司次郎重忠公の遺跡・伝承等	府中史談19号	
18	平成6年	平野富雄	重忠さま		
19	平成7年	片山眞佐子	畠山庄司次郎重忠公の遺跡・伝承等	府中史談21号	
20	平成8年	浦和市教育委員会	天然記念物キャラの木保存事業報告書		
21	平成9年	横浜市旭区役所	畠山重忠物語(漫画)		
22	平成9年	嵐山町	戦い・祈り・人々の暮らし	嵐山町博物誌第5巻	
23	平成9年	清水寿	畠山・本田の昔話あれこれ		
24	平成10年	川本町遺跡調査会	畠山館跡		川本町遺跡調査会
25	平成11年	小川町	小川町の歴史資料編2 古代中世 I		
26	平成13年	福島茂徳	絵本畠山重忠一代記		川本町教育委員会
27	平成13年	田代脩	都幾川村史通史編	第2章	都幾川村
28	平成14年	福島茂徳	紙芝居畠山重忠一代記		川本町教育委員会
29	平成14年	福田豊彦	吾妻鏡・玉葉 データベース	新訂増補国史大系本	吉川弘文館
30	平成14年	神奈川県立公文書館	鎌倉御家人畠山重忠と二俣川の歴史		神奈川県立公文書館
31	平成14年	埼玉県立歴史資料館	畠山重忠		
32	平成24年	清水亮	シリーズ中世関東武士の研究第7巻 畠山重忠		戎光祥出版
33	平成24年	埼玉県嵐山史跡の博物館	秩父平氏の盛衰 畠山重忠と葛西清重		勉誠出版
34	平成24年	深谷市教育委員会	畠山重忠顕彰事業企画展 図録 畠山重忠と武蔵武士		深谷市教育委員会
35	平成24年	深谷市教育委員会	武蔵武士の鑑 畠山重忠(読本)		深谷市教育委員会
36	平成30年	清水亮	中世武士 畠山重忠 秩父平氏の嫡流		吉川弘文館

※ 本辞典の掲載内容は、予告なく再編集されることがあります。

謝 辞

本辞典は、これまでに判明している畠山重忠ゆかりの地や関連事項を集成したものです。

本辞典の基礎となった旧「畠山重忠辞典」は、多くの関係機関、関係者のみなさんのご協力をいただき作り上げてきたもので、先人の努力とご協力くださった方々に対して、感謝の念に堪えません。

今般、過去から引き継いだ多くの知見に近年の新たな情報をあわせて本辞典をまとめたことを契機に、畠山重忠公の顕彰を通して、地域の歴史と文化に対する市民の理解、知的好奇心がより一層深まり、未来へと活かされ発展していくことを祈念し、謝辞にかえさせていただきます。

令和2年7月

深谷市教育委員会

お く づ け

編集・発行 深谷市教育委員会
(事務局：教育部 文化振興課)

令和2年7月



深谷市